超次元ゲイム ネプテューヌmk2 もう一人の協力者

らい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超次元ゲイム　ネプテューヌｍｋ２　もう一人の協力者

【Ｎコード】
Ｎ６６２１Ｗ

【作者名】
らい

【あらすじ】
どこにでも居るような一人の青年、沖中宏樹。そんな彼に降りかかるコレでもかと言うくらいのテンプレな不幸。でもやっぱりテンプレだけあって転生することができることとなった。彼が転生先に選んだのは「超次元ゲイムネプテューヌｍｋ２」。さて、彼はこの世界でどのように生きていくのか。

現在は原作開始前、ルウィーでの冒険終了。ラステイションに向かっている最中。

プロローグと言う名の転生時能力のお品書き（前書き）

とりあえず、書き始めてみました。

プロローグと言う名の転生時能力のお品書き

「さて、ここは一体どこなんだろう」
そう言って、俺は辺りを見渡してみる。
見渡しては見たが、何もない白い空間が広がっているだけだった。
何か思いつきそうなんだが、心がそれを拒否している。
まぁ、いい。ちょっと思い出してみるか。

俺こと沖中宏樹は、久しぶりに取った有給休暇を利用し、秋葉原に来ていた。
ぶっちゃけ、今日から数日間休みをもらったので、そのときにやるゲームを探しに来たのだ。
まだまだ未消化のゲームもあるが、それはそれ。それに、ウォレット残額も少なくなってきたし、買っておこうかと。
で、ＪＲ改札から出てソフマップに向かおうとして、小さい女の子が道路に飛び出すのを見て。
……そこで記憶が終わっている。

「……あ、そういうことか」
俺は、結論にぶち当たった。
何のことはない。女の子を助けようとして……自分が身代わりになった、ということだった。

『そういうことじゃよ』
どこからともなく、そんな声が聞こえてきた。
その声はさらに続ける。
『しかも、その少女は元々助かる予定だったのだがな』
「……え゛」

声の主によると、少女は元々奇跡的に助かる「予定」だったらしい。
だが、俺が介入したことにより、「確実」に助かった。
その代わり、何も被害を受けるはずのなかった俺が、「死亡」ということになってしまったとのこと。
そのため、被害者「０」のはずの事故が被害者「１」となってしまったらしい。
そうなってしまったため、原因追求をしたところ、ある記述を発見した。
それは、俺の名前の今日以降の予定がすべて黒く塗りつぶされている書類だったらしい。
しかも、それをやったのはこの声の主の孫だったそうな。

『本当に申し訳ない。なんと言って詫びればよいか……』
声の主の声のトーンは少し下がり、色々と言葉を選んで話しているようだった。
「まぁ、いいじゃないですか。あの子は助かったんでしょ？」
『うむ、まあそれはそうなんじゃが』
「で、俺は元の世界には生き返れない、と」
『そういうことじゃ。話が早くて助かる』
「ってことは、転生は可能？」
『ああ、もちろん。ついでに迷惑を掛けた詫びに、能力の付加もできるが』
転生キタ――――――――（゜∀゜）――――――――！！！！！
「で、どんな世界でも可能？アニメも？ゲームも？」
『その辺はまかせろ。抜かりはない』

じゃぁ、「ぼくのかんがえたさいきょうのそうび」でも実行させてもらいましょうか。
「じゃぁ、世界は『超次元ゲイムネプテューヌｍｋ２』の世界で」
『ちょっとまて、あのトンデモ世界か？』

「えぇ、あのトンチキ（褒め言葉）な世界です」
『で、能力は？』
「えとですね、武装神姫の武装が欲しいです。で、……ってことをやりたいんですが、可能です？」
『それくらいはお安い御用じゃ』
「じゃ、それに追加で。全能力は女神たちの擬人化状態と同等、かつ……した場合は女神化した時と同じくらいの力量で」
『まぁ、それもどうにかなるな』
「んじゃあとは、今言ったのがレベル１の状態で、レベルがカンストしたら女神より強くなるとかは可能？」
『……もちろん可能じゃが、凶悪じゃな』
「いや、じゃないと面白くありませんからね」
『他には何かないか？』
「んじゃ、原作開始の４年前からスタートで」
『ん、そんなことか？そんなことは簡単だが、どうするんじゃ？』
「もちろん、４女神と顔見知りになっておく。それだけだよ」
『わかった。名前はどうする？』
「今のままでもいいけど……『ケイス』で」
『『ケイス』じゃな。』
「あ、あと『イストワール』には怪しまれないようにして欲しい」
『それは基本じゃの。おぬしのことは書かれていることにしておこう。あとはないか？』
「女神や、女神候補生と友好な関係を築きたいな」
『あいわかった（魅力ＭＡＸな）』

『さて、と。これで設定は終わった。あとはおぬしが世界に行くだけじゃ』
「ありがとな、神様」
『おや、わしは一度も「神」とは言ってないつもりじゃったが』
「いや、こんなことできるのは神様だけだろ？」

『では、おぬしの次の人生に幸のあらんことを』
「サンキュー、神様」

そう言って、彼の姿が薄くなり始めた。
転生が開始されたのだ。

さて、ここから彼の姿が完全に消えてからが彼の第二の人生の開始となる。
わしは、それをゆっくりと眺めさせてもらおうかの。

プロローグと言う名の転生時能力のお品書き（後書き）

さて、始まってしまいました。
すでに、自分の中のプロットと違うんですが……（汗
最低でも週1更新くらいにはしたいと思います。

オリジナルキャラ設定（前書き）

ということで、主人公の設定です。

オリジナルキャラ設定

キャラクター名
ケイス

武装
近接攻撃
M４ライトセイバー
近接戦闘時にはこの武装をよく使用する。
いわゆるライトセイバー。
双剣モードでよく使われる。

M８ライトセイバー
M４ライトセイバーの強化版
だが、出力が上がったためかエネルギー切れが早い。
そのため、あまり使われない。

M４ダブルライトセイバー
M４ライトセイバー２振りを柄の部分で連結した武装。
M４ライトセイバーで攻撃時にこの形にすることが多い。

遠隔武装
アルヴォPDW１１
いわゆるオート小銃。
あまり威力は高くないが、命中率が高いため愛用。

LC５レーザーライフル
いわゆるレーザー砲。
エネルギーチャージに時間がかかってしまうため、使用頻度

は少ない。

が、出力は現段階ではピカイチ。

オリジナルキャラ設定（後書き）

ということで、オリ主君の武装紹介でした。
まぁ、見る人が見れば分かるとおり、あんばるｍｋ２の武装です。
ちょっとまだ隠し玉がありますが、それはまたいずれ。

ということで、次回予告。
超次元ゲイムネプテューヌの世界に降り立ったケイス。
さて、彼はどこに降り立ったんでしょうかね。
（指定してなかったしね）
次回、第１話「やっぱりはじめは紫でしょ」をお楽しみに。
…って、楽しみにしててくれる人がいるんだろうか…

第1話　はじまりはスライヌとともに（前書き）

サブタイトルが前回の次回予告と違う？
仕様です。

さてさて、ケイスはどこの大陸に行くことになったのやら。

第1話　はじまりはスライヌとともに

さて、ここはどこだろう。
そういえば、転生先の指定をしてなかったな。

そう言って、ケイスは辺りを見渡す。
近くには木々が生い茂り、草の匂いまでする。

（ここは、プラネテューヌかリーンボックスか）

俺はそう推理する。
ラステイションであればこのような場所はないだろうし、ルウィーであれば雪に覆われているため、除外。
後もうひとつ、決定付けるものがあればな。
そう思いながら、辺りの草に体を預け寝転がった。
空は青く広がり、平和そのものだ。

（そういえば、まだ原作の4年前だしな。まだ女神が健在だから平和なんだろう）
そう思い寝ようとしたが、そうは問屋が卸してくれないようだった。

「スラー！」
スライヌだった。
まごうことなきスライヌだった。

「なんだ、スライヌかよ。どうせならダイコンダーとか馬鳥くらい連れて来いよ」

そう言われ腹が立ったのか、スライヌはケイスに攻撃を開始した。

……まぁ、ちくちくアタック程度だったが。
あぁ、めんどくせぇ。
放っておくか。そのうち飽きてどっか行くだろ。
そう思いながら、もう一度寝ようとしていた。

side ????

あぁ、もうお姉ちゃんどこ行っちゃったんだろ。
いーすんさんは「別にいいですよ、いつものことですから」って言ってたけど、やっぱり見つけてお仕事をしてもらわないとね。
そう思い、お姉ちゃんがいつも暇をつぶしている森に来てみた。

「お姉ちゃーん、どこにいるのー？」

返事がない。
ここじゃなかったのかな？
そう思ったときだった。

「スラッ、スラッ、スラーッ」

あれはスライヌの鳴き声。
しかも、何か攻撃しているっぽい！
私は鳴き声のする方へ駆け出した。
そして、そこで見たのは、倒れている人に攻撃しているスライヌだった。

「こらーっ、やめなさーい」
そう言って私はスライヌの方に駆け出した。
そんな私に気づいたのか、スライヌは一目散に逃げていった。

side　????　END

「大丈夫、ですか？」
スライヌのちくちくアタックが止みどこかへ逃げて行ったあと、そんな声が聞こえてきた。
……この「ほっちゃん」ボイスは……ネプギアか。
そんなことを考えていると、
「あの、どこか怪我されているんですか？」
そう言って心配そうに顔を近づけてきた。
近い、近いっ。

「いや、ごめんごめん。寝てた」
ズルッとコケる音がする。
「さすがに煩いなぁと思ってたんだが、追っ払ってくれたんだ。ありがと」
にこっと笑いながら、そういう風にお礼を述べる。
「い、いえ。でも本当に大丈夫なんですか？」
やっぱり心配そうに聞いてくる。うーん、やっぱり優等生だなぁ。
「大丈夫大丈夫。ほら、ね」
そう言ってスライヌ(あいつら)が攻撃していた部分を見せる。
ちょっとほつれはしているが影響はない。

「さて、と」
そう言って立ち上がり、ネプギアのほうを見る。
「冒険家、ケイスといいます。今回はありがとうございました」
そう言って、右手を差し出す。
その手を取って、彼女はこう言った。
「私はネプギアといいます。お力になれて何よりです」

どちらからともなく、笑いあった。

「そういえばケイスさん、どうしてあんなところに？」
森の中を歩きながらネプギアが聞いてくる。
「いや、お恥ずかしながら路銀が尽きてね。何か稼ごうと思ったんだけど協会もギルドも分からなくて、あそこでフテ寝してた」
大嘘である。
「あ、そうなんですか。ギルドはちょっと分かりませんけど、協会にならご案内できますよ？」
ちっとも疑おうとしない。ええ娘や。
「ほんと？助かるよ」
そう言って、両手を握って感謝の意を表した。
心なしかネプギアの頬が染まっていたが、気のせいだろう。

「それじゃ、協会にご案内します。ついてきていただけます？」
そう言って、ネプギアは森の出口に向かって歩き始めた。
俺はその後をついていくことにした。

俺の冒険はここから始まる。
さて、これからどうなるのか……。

……ＳＡＶＥ

第1話　はじまりはスライヌとともに（後書き）

ネプギアに協会まで連れてきてもらったケイス。
ここで衝撃の事実が…？

次回、「協会にて（仮）」

「スライヌにいじめられてた人を保護してきましたー」
「ちょっと待てぃ」

第2話　協会へＧＯ（前書き）

ネプギアに救われた（？）ケイス。
彼は、仕事を求めて協会に向かっていた。

第2話　協会へＧＯ

ｓｉｄｅ　ネプギア

ケイスさん、ちゃんとついてきてるかな？
そう思い、私は後ろを振り向く。
ちょっと離れてはいるけど、ちゃんとついてきてるみたいだ。
でも、何かちょっと寂しい。
私はそこで立ち止まって後ろを振り返り、ケイスさんが追いつくのを待った。

ｓｉｄｅ　ネプギア　ＥＮＤ

ネプギアちゃんが立ち止まって、こっちを見ていた。
どうしたんだろう。
「どうした？何か忘れ物でもあった？」
俺はそう問いかけたが、返ってきたのは思ってもみない言葉だった。
「何か、話しながら行きませんか？」

ｓｉｄｅ　ネプギア

あ、唐突過ぎたかな。
何か、ケイスさんが困ってる様に見えた。
ありえない言葉を聞いたかのような顔をしてる。
そんなに変かな、お話したいっていうのは。
それとも、私なんかとお話したくないってことなのかな……。

ｓｉｄｅ　ネプギア　ＥＮＤ

うわ。ネプギアちゃんが何か泣きそうになってる（汗。
さすがに、そんな表情を見せられて「ヤダ」と答えられるほど俺も鬼じゃない。
「いいよ。どんな話をしようか」
そう答えると、ネプギアの表情がぱぁっと笑顔になった。
うん、やっぱり女の子は笑顔のほうがいいや。

「ケイスさんって冒険者って言ってましたよね。でも、そんな軽装で冒険しているんですか？」
あぁ、ごもっとも。
武器のひとつも持ってないからな。
「まぁ、ね。それに武器とかは、よっと」
と言って、武器を召還するようにイメージする。
すると、両手に質量が発生する。
「この通り、いつでも出せるからね」
そう言いながら召還した武器を霧散させる。
そしてネプギアちゃんのほうを見ると、目をキラキラさせていた。

「すごいですっ。武器を召還できる人、はじめて会いました」
そのあとも、どういう風にやっているのかとか、他にどんな武器があるのかとか、色々と聞かれた。
まぁ、悪い気はしないし、知っておいてもらったほうが動きやすいってのもあったから、全部見せたけどね。今のところ呼べる武装は。
「へぇ。亜空間から呼び出すイメージ、ですか」
難しそうですね、と苦笑いしながら尋ねてくる。
こっちも実際どんな風になっているかわからないから、有耶無耶にしたが。
突っ込まれると回答に困るしな。

そんなこんなで、協会についた。
へぇ、ゲームでは外観は表示されてなかったけど、こんな感じだったんだ。
普通の教会と同じような感じで、違うところといえば、十字架がないくらいか。
「いーすんさん、ただいまー」
ネプギアちゃんはそう言いながら入っていった。
おいおい、俺に女神候補生ってこと言ってないのにいいのかよ。
「あ、ネプギアさん、お帰りなさい。あら？そちらはの方はどちら様ですか？」
そう言いながら声の主は俺のほうを見る。
あ。いーすんさんだ。ちっこいのう。
「えっとね、お姉ちゃんを探してたときに、スライヌにいじめられてたから助けたんですよー」
いや、ネプギアちゃん。確かに事実かもしれないけど、それはあんまりじゃ……。

「プラネテューヌの教祖、イストワール様ですね。私は旅の冒険家、ケイスと申します。お見知りおきを」
一応、はじめだからね。このくらいやっておかないと。
「自己紹介、ありがとうございます。私のことはご存知のようですが、一応。教祖を務めております、イストワールと申します。さて、本日は協会に何の御用でしょうか？」
いきなり眼光が鋭くなる。まぁ、女神候補生にくっついて来る人間なんてそうそういないし、怪しすぎるわな。
「すいません、路銀が尽きてしまいなにか職があれば、と思いまして。そのときに、そちらのネプギアさんと知り合ったんですよ」
そう言うと、いーすんさんはネプギアちゃんのほうを向き、事実かを確認しているようだった。

まぁ、金がないのは事実だし、何かの討伐とかないかな～とか思っていたし。

「本当に心苦しいのですが、紹介できるのもがないのですよ」
ま、そうだろうねぇ。
「ギルドを紹介しますが、行ってみますか？」
おぉ、それでもいいや。
そう思っていると、ネプギアちゃんがいーすんさんに何か話していた。

side　ネプギア

「いーすんさん、私も一緒にギルドに行ってみてもいいですか？」
ケイスさんがどんな戦い方をするのかが気になっていた私は、いーすんさんにそう聞いてみた。
「ダメです。ネプギアさん、貴方は女神候補生なんですよ？何かがあってからでは遅いんです」
いーすんさんはそう言って、了承してくれなかった。うー、ケチ。
「じゃぁ、私が女神候補生だってことを打ち明けて、そのボディーガードとしてついてきてっもらうって言うのはどうでしょう？」
私もそんなに簡単には退かない。だって、お姉ちゃんやアイエフさん、コンパさん以外の戦い方って見たことがないから。
「それじゃ、彼にアイエフさんと模擬戦をやってもらいましょう。それで、彼が勝てたらその通りにしてもいい、ということにでもしましょうか」
やたっ。これで、ケイスさんと一緒に行動できる、かも。

side　ネプギア　END

ｓｉｄｅ　イストワール

ネプギアさんにも困ったものです。
彼女が信じているようですから、いい人なのでしょうが。
それでも、多分アイエフさんには勝てないでしょうから、この案件は杞憂ですね。
さて、それじゃアイエフさんを呼びましょうか。

ｓｉｄｅ　イストワール　ＥＮＤ

「できれば早くギルドに紹介して欲しいんだけど」
俺はそうネプギアちゃんといーすんさんに話しかける。
「ちょっとだけ待ってください。ちょっとテストのようなことをしてもらおうと思いまして」
そういって、いーすんさんは連絡を取り始めた。
で、ネプギアちゃんは、というと。
「すいません、ケイスさん。私がケイスさんと一緒にギルドに行ってみたい、って言ったらこんなことになっちゃって」
まぁ、そうだろうなぁ。原作でもギョウカイ墓場から帰ってきたときに初めてギルドに行く、って描写になってたし。
ん？もしかして、ちょっとした原作ブレイクか？これは。
「で、何でそんなことになってるの？」
まぁ、多分女神候補生だからってことだけなんだろうけど。
「あ、はい。それは、私がプラネテューヌ（ここ）の女神候補生だから、みたいです」
あー、やっぱり。
「で、ボディーガード的な位置なのね、俺が」
「はいっ」

ふぅ、まぁいっか。

さて、それじゃ対戦相手を待ちましょうかね。

……ＳＡＶＥ

第2話　協会へＧＯ（後書き）

腕試しをすることになったケイス。
その相手はアイエフ。
双剣使い同士、どんな戦いになるのやら。
次回、第3話　「原作キャラとの戦い（仮）」
「へぇ、結構強そうじゃない」
「お手柔らかにお願いしますね、アイエフさん」

第3話　少女と双剣と新たな力（前書き）

ひょんなことからアイエフと模擬戦を行うことになったケイス。
彼は勝つことができるのか。

第3話　少女と双剣と新たな力

ここは、プラネテューヌの協会の中庭。
俺の前には、戦闘準備万端といった感じでアイエフが軽く体を動かしていた。
というか実は、別にこの人と戦わなくてもいいんじゃない？

ｓｉｄｅ　アイエフ

なーんだ。
冒険者、って言ってたからもっとゴツイのを想像してたけど、案外ひ弱そうなのね。
これなら、簡単に勝てそうだわ。
でも、何でネプギアはこんなのが気になってるのかしら。

ｓｉｄｅ　アイエフ　ＥＮＤ

「それでは、はじめてください」
そう、いーすんさんの声が響いた。
その次の瞬間、アイエフは先手必勝とばかりに突っ込んできた。
こっちは、武器も用意してないってのに。

「銃よ」
そう言うと、俺の右手にアルヴォＰＤＷ１１が現れる。
それをアイエフに向け、トリガーを引く。
ドガガガガッ。
アイエフは咄嗟にその銃撃を横に跳んで避け、そこからまたこちら

に迫る。
「危ないじゃない！」
「速攻で突っ込んできたアイエフ（あなた）に言われたくない」
そう言いつつ、アルヴォＰＤＷ１１を右手から消す。
そして、両手にＭ４ライトセイバーを出す。
コレで迎え撃つ！

ｓｉｄｅ　アイエフ

さっき、何ももってなかったわよね、彼。
で、いきなり銃を乱射するなんて。
どこから出したのよ、なんて思ってたら剣！？
何の手品よ、全く。

ｓｉｄｅ　アイエフ　ＥＮＤ

「面白い手品ね」
「手品かどうか、すぐに分かるさ」
双剣　ｖｓ　双剣
その戦いの火蓋は切って落とされた。

アイエフの右手が上から切りかかる。
ケイスはそれを左手の剣で受ける。
その瞬間、アイエフは左手を横から凪ぐ。
ケイスはそれに反応し、右手の剣で受け流す。
「なかなか、やるじゃない」
「そちらこそ」
その後も何回も剣戟の応酬が続いたが、双方ともに決定打を与えられず数分が過ぎた。

そのとき、二人の戦いに動きがあった。
アイエフが、ケイスから少しだけ間を取ったのだ。

「一気にカタをつけてあげる」
アイエフはそう言うと、俺のほうに突っ込んできた。
（うわっ、マズっ）
そう思うが、体が思うように動いてくれない。
なんとか両腕を前に持って行き、防御体制を整える。
「フフっ、どこまで耐えられるかしら。『ソウルズコンビネーション！』」
縦横無尽に双剣が振られる。かつ、蹴りも同じように放たれる。
キンッ、キィンッ、ドギャギャギャッ！
数発もらってしまったが、どうにか凌いだ。
「ハァ、ハァッ」
自然と息も荒くなってしまう。

「随分、やるじゃない」
アイエフは不敵な笑顔を浮かべながらそう言った。
確かに、防げたのはかなり運がよかったからだ。
「お褒めに預かり、恐悦至極」
そう言いながら、ライトセイバーを構える。
「じゃ、コレで終わりにしてあげる」
そう言って、アイエフが再び突っ込んできた。
マズい。
そう思ったときだった。

キィィィィン。
そんな音を立てて、辺りの時間が止まっていた。
だが、その中で動く影が２つある。
ひとつはケイス自身。

もうひとつは、奇妙な足音を立てながら、ケイスのほうへ近づいてきた。
まるで、ロボットが歩いているかのように。

『オヌシが、あの神とやらが言っていた少年でゴザルか？』
俺の目の前まで歩いてきた影がそうつぶやく。
なんか、この言葉遣い、聞いたことがあるんだが。
『どうしたのでゴザル？さては、拙者がカッコよくて見惚れていたでゴザルか？』
間違いない。
「いや、なんでもないさ。爆炎斬鬼丸」
『おぉ、拙者の名前を知っているとは。拙者も有名になったでゴザルなぁ。』
いやいや、そうじゃないってば。
「で、どういうことなんだ？」
ちょっと（どころではないが）不思議に思ったため、聞いてみた。
『拙者の力、受け取って欲しいでゴザル』
？？？あ。もしかして。
「神様から、そう頼まれたってことか？」
『ウム』
「装備とか技とか？」
『ウム』
「でも、俺機械じゃないから使えないかもしれないけど、大丈夫なのか？」
『そこは、「おやくそく」とやらで大丈夫だと申しておったでゴザル』
さ、さいですか。
「ちなみに、他の仲間は？」
『全員違う大陸、と言うのでゴザルか？バラバラになったでゴザル』
ってことは、全部の大陸を廻れば、全員の力が使えるようになるわ

けか。
「よっしゃ、じゃ、すぐにやってくれ」
『承知！』
そう言うと、一斬鬼丸（彼）は光となり俺に吸収されていった。
その瞬間、彼の持つ装備、技が知識として俺の中に蓄積された。
＜斬鬼丸の技術をすべて覚えた＞
『さて、拙者にできるのはここまででゴザル』
それを最後に、彼の言葉は聞こえなくなった。

で、元の時間軸に戻ったんだが。
やっぱりアイエフが突っ込んできてる最中で。
さて、どうしようかと考えながら剣を捌いていた。
「な、何で？さっきは手を抜いていたの？」
そう言われ、気付く。
考え事をしながら、剣を捌いていることに。
（技とかだけじゃなく、こういうのも引き継がれるのか）
「手を抜いていたわけじゃなくて、思い出しただけだ。捌き方を」
そう言いながら、少し後ろに下がる。

（そういえば、一回やってみたかったんだよね）
そう思いながら、双剣のライトセイバーを消す。
そして、一回り大きなＭ８ライトセイバーを片方だけ召還する。
「さて、ではこちらから行くぞ」
そして、今度は俺の方からアイエフに突っ込んだ。
アイエフに肉薄したときに、技を放つ。
『虚空……雷撃剣』
剣捌きは左から右へ凪ぐだけ。
ただ、剣速が尋常でないほど早い。
すなわち、「雷撃」のように。
アイエフはどうにか反応はできたが、そのまま吹き飛ばされてしま

った。
そして木に叩きつけられ、気を失ってしまったようだ。
……SAVE

第3話　少女と双剣と新たな力（後書き）

アイエフに勝ったケイス。
そこに、ネプテューヌが現れる。
次回、「第４話　プラネテューヌに血の雨は降ったり降らなかったり（仮）」

今回登場してもらった、爆炎斬鬼丸さんですが、
その昔「ＰＯＰＣＯＭ」というパソコン雑誌に掲載されていた漫画のキャラクターです。
本文にもあったとおり、他の仲間も登場予定です。
彼らのことについては、そのうち説明しようと思います。

それでは、また次回。

第４話　ギルドでの騒動（前書き）

辛うじてアイエフとの戦闘で勝利したケイス。
彼には無事、仕事が与えられるのだろうか？

第４話　ギルドでの騒動

ふぅ、どうにか勝ったか。
というか、斬鬼丸の力がなかったらヤバかったな。
そう思いながら、木に叩きつけられたアイエフのほうへ向かった。

ｓｉｄｅ　アイエフ

イタタタタ。
まったく、よくもやってくれたじゃない。
それに、途中まで手を抜いて戦われちゃうし。
ま、それについては、様子見と油断させる意図があったのかもしれないけどね。

そのとき、目の前に影が現れた。
さっき私をここまで吹っ飛ばしたアイツだ。
アイツは
「大丈夫か？」
と言いながら手を差し伸べてきた。
癪に障るけど、しょうがない。
私はその手を取って、引き起こしてもらった。

ｓｉｄｅ　アイエフ　ＥＮＤ

「本当に申し訳なかった。怪我はないか？」
そう言いながら、俺は頭を下げた。
理由はともあれ、下手をすれば大怪我をさせてしまう可能性があっ

たからだ。
けど、アイエフは「大丈夫よ」の一言で片付けてしまった。
やっぱり強いな、彼女は。

「ケイスさん、本当にすごいです。アイエフさんに勝っちゃうなんて」
「そうですね。彼女はプラネテューヌの有効戦力の一人だと言うのに」
ネプギアといーすんさんがそのように言ってきた。
「いやいや、運がよかったんですよ」
俺はそう答えた。
「それでは約束通り、ギルドにご案内しましょうか」
いーすんさんは「では、ついて来てください」というと、ふよふよと浮かびながら中庭を出て行った。
どうやら、ギルドに案内してくれるようだ。
「あ、私も行きます」
そう言って、ネプギアもついてきた。……本当に行く気満々だったのね。

一行がギルドにつくと、中で何かもめているようだった。
どうしたんだろうと思い中の人に声を掛けると、
「ネプテューヌ様が、一番高いクラスの討伐依頼を受けようとしていたため、みんなでとめていたんですよ」
と返ってきた。

ｓｉｄｅ　ネプテューヌ

「だーかーらー、そんなの大丈夫だって。わたしが強いのみんな知ってるでしょ？」

「ですから、先ほどから何度も申し上げている通り、何かがあってからでは遅いのです」
うー、このわからず屋めー。
そんな時、横から割り込みの声が入った。
「だったら、俺が一緒に行こう」
……誰？

ｓｉｄｅ　ネプテューヌ　ＥＮＤ

思わず口を出してしまったが、この空気をどうすればいいんだ。
何か、みんな俺のほうを見てヒソヒソやっている。
「失礼ですが、あなたは？」
「あ、すいません。今日プラネテューヌに来たケイスと言います」
俺は正直にそういう。
「そうですか。では、このギルドに来るのは……」
「えぇ、はじめてです。ですが、護衛くらいならできると思いますよ？」
そういうと、ざわざわとなり始めた。
ま、無理もないか。女神の護衛が簡単とか言っちゃったし。
「貴方は護衛を何だと……」
ギルドの人がそう言おうとしたとき、いーすんさんが口を挟んだ。
「大丈夫ですよ、ギルドマスター。彼なら信用できます」
え？？？
「先ほど、彼にはネプギアさんの護衛となる試験を受けていただきました。結果は合格でした」
ちょ、おまっ。
「ちなみに、どのような試験だったのですか？」
そこ、いらんことを聞くな。
「アイエフさんとの戦闘。そして、勝利です」

そう言うと、アレだけざわざわしていたギルドの中がピタッと静かになった。

「やー、さっきはありがとね。助かったよー」
ネプテューヌは俺のほうに笑顔を向けてくる。
「あ、自己紹介がまだだったよね。私はネプテューヌだよ。プラネテューヌの女神をやってるんだー」
「私はケイスと言います。よろしくお願いします、ネプテューヌ様」
「固い、固いよケイスさん。もっとフランクにやってもらってかまわないよ？」
「わかった。こんな感じでいいですか、ネプテューヌ？」
「ＯＫだよ」

そんなことをやっているうちに、さっきアイエフと戦ったときの話になった。
「そういえば、アイちゃんに勝ったんだって？強いんだー」
「いえいえ、ちょうど運がよかっただけですよ」
「それでもだよ。私だって結構苦戦するんだから」
「そうなんですか。でも、女神化すれば勝てるんでしょ？」
「まあねー。ってあれ？女神化とか話したっけ？？」
やべっ、知識のでしゃべっちまった。
どうしよ。
「いや、あはは。だって、さっき女神様って言ってたじゃないですか。でも、俺たちの知ってる女神様とネプテューヌさんの姿が違うから、変身とかするのかな、って」
脂汗をだらだらと流しながらしどろもどろに答えた。
「すごーい。あたりだよ。」
……通じちゃったよ、オイ。

「そういえば、ギルドで何の依頼を受けたんですか？」

ちょっと興味があり、聞いてみた。
「いやー、山岳地帯に野良ドラゴンが出たって事だったんでそれの退治を受けたんだよ」
オイ、マジヤバいって。それは。
俺、もしかしてそこで死ぬんかな。

ｓｉｄｅ　ネプギア

お姉ちゃんにケイスさんを取られちゃった。
私が一緒にクエストを受けるはずだったのに。
でも、次は一緒にクエストを受けられるよね？

ｓｉｄｅ　ネプギア　ＥＮＤ

……ＳＡＶＥ

第4話　ギルドでの騒動（後書き）

ネプテューヌと一緒にクエストを受けたケイス。
そこでは、何が待っているのか。
次回、第5話　初めてのクエスト（仮）

クエストがクエストなんで、おそらくネプが変身すると思います。
うまく書けるか不安ですが。
それでは、また次回。

第5話　はじめてのクエスト、強力な武装（前書き）

成り行きでネプテューヌと野良ドラゴンの討伐をすることになったケイス。
果たして、彼に無事明日は来るのか？

第5話　はじめてのクエスト、強力な武装

「それじゃー、行ってくるねー」
ネプテューヌはみんなにそう声を掛けていた。
対する俺は、
「あぁ、なんでこんなことになってるんだろ」
そうつぶやきながら、支度をしていた。
「ま、どうにかなるわよ」
アイエフはそう言うが、なかなか吹っ切れるものでもない。
って、待てよ。
そういえばこのクエストの報酬を聞いてなかった。

「なぁ、ギルドマスターさん。このクエストの報酬っていかほど？」
「えーと、ですね。このくらいです」
そう言いながら1枚の紙を出してきた。
何々？成功報酬で１００万クレジット？
「よし、ネプテューヌ。早く行くぞ」
そう言って、支度をする手を早めた。

ｓｉｄｅ　ネプテューヌ

うわ。現金だなぁ、ケイスさんは。
でも、不思議と嫌な感じはしない。
何でだろう。
そんなことを思っていると、ネプギアが話しかけてきた。

「お姉ちゃん、無理だけはしないでね？」
心配性だなぁ、我が妹ながら。

「大丈夫だよ。そんなに危なくないってば。それに…」
そう言いながら、ケイスさんのほうを向く。
「今回はケイスさんも一緒だから。だから、あまり無理はしないよ」
「うん、そうだね」
わたしは、どっちかって言うとケイスさんが無理をしないかどうかって方が気にかかってるんだけどね。

ｓｉｄｅ　ネプテューヌ　ＥＮＤ

「じゃ、いってきまーす」
ネプテューヌがそんな元気な声を出した。
街の方からは、「しっかりねー」とか「怪我しちゃ駄目ですよー」とか、そんな声が聞こえてきた。
ちなみに行き先はハネダマウンテン。
ハネダシティから少し離れたところにある山だ。
プラネテューヌからだと、歩いて数時間らしい。

「そういえば、ケイスさんって得物は何を使ってるの？」
ネプテューヌが歩きながらそんな風に聞いてきた。
「アイエフたちから聞いてないか？剣と銃だよ」
「見せて見せて」
ネプテューヌが目をきらきらさせながら言ってきた。
おそらく、『何もないところから取り出す』って言うのを聞いているんだろう。
やっぱり、ネプギアの姉さんだ。よく似てるよ。
そう思いながら、ほいっとＭ４ライトセイバーを取り出す。
そして、それをネプテューヌに渡してやった。
「へぇ、軽いし扱いやすいね。わたしにぴったりだ」
「…やらんぞ」

ネプテューヌは「けちー」といいながら返してきた。
「あと、銃のほうだが…」
そう言いながらアルヴォPDW11を取り出し、すぐに引き金を引く。
ダダダダッ。
アルヴォPDW11の向き先には数匹のスライヌがおり、全弾命中していた。
「へー、すごいね。そんなことができるんだ」
ネプテューヌはぱちぱちと手を叩きながらその様を見ていた。
「本当はもうひとつあるんだが、それは後で、な」

で。
そうこうしている間に、目的地に到着。
ちなみに、目の前には数匹のドラゴン。
「あぁ、これが今回の討伐対象か」
俺がそう言うと、ネプテューヌは首を横に振りながらこう言った。
「たぶん、このドラゴンは見張りか何かだよ。本命は後で来るよ、多分」
来てほしくないなぁ。
と思っていると、4匹のドラゴンがこちらに切り込んできた。
だが、1匹だけ俺たちの来たほうと逆方向に走っていった。
マジで仲間を呼んでくる気か。
だが、そっちを気にしている余裕もなく、切り込んできたドラゴンの対処に追われる。
俺はすぐにM4ライトセイバーを2振り取り出し、両手に構えた。
「よし、行くぞ」
そう言い、ドラゴンを迎え撃つ。
「うお、硬っ」
マジで硬かった。ドラゴンメイルとか、硬いわけだよ。
それでも、何回か斬っているうちに傷を負わせることができ、倒す

ことができた。
「そっちはどうだ？」
「こっちも今終わったトコだよー」
どうにか凌いだな、と思いながら地面に座り込んだ。
が、やっぱりそれだけでは終わらなかった。
「ケイスさん、新しいのが来たよ、多分２～３０匹」
おいおい、勘弁しろよ。

ドラゴンたちは、やっぱりこちらに突っ込んできた。
だが、先ほどの戦闘後ということもあり、おれは少し疲れていた。
ネプテューヌもそれは変わらないようだった。
「ネプテューヌ、ここは変身してどうにか時間を稼いでくれ」
俺はそう言うと、Ｍ４ライトセイバーをしまい、チャージの体制に入る。
「わたしひとりで？」
「あぁ、凌ぐだけでいい。少ししたら、俺のほうで殲滅する」
「わかったよ！変身！！」
そう言うと、ネプテューヌは女神化した。

ｓｉｄｅ　ネプテューヌ

「さぁ、どこからでもかかってらっしゃい」
私はそう言うと剣を構えた。
それを警戒してか、ドラゴンたちはそこで立ち止まってしまった。
そして、ある方向をいっせいに向く。
そう、ケイスがいる方向だった。
「それだけは、絶対にさせない」
そう言いながら、私はドラゴンたちを必死で止めていた。止めようとしていた。

でも、一人では限界があり、数匹は段々とケイスに近付いて行ってしまう。
その数匹に対して剣を振る。
そうすると今度は他の数匹がケイスに近付いてしまう。
結果的に、全部が近付いてしまうことになってしまった。
「駄目っ。ごめん、ケイス」
ドラゴンたちはケイスのすぐそこまで近付いてしまった。
そんな時だった。
「サンキュー、ネプテューヌ。どうにかなったぜ」
そんな声が聞こえてきた。

ｓｉｄｅ　ネプテューヌ　ＥＮＤ

「ネプテューヌ、すぐこっちに来い」
そう言って、ネプテューヌの
手を引っ張り、俺の後ろへ移動させる。
「いいモン見せてやるよ」
そう言って、俺はＬＣ５レーザーライフルを呼び出した。
すでに、チャージも完了させてある。
「行くぜ、ファイヤー！！」
そう言ってトリガーを引く。
辺りが閃光に包まれ、俺たちとドラゴンはその閃光に巻き込まれた。
数秒後、そこに残っていたのは俺とネプテューヌだけだった。

「ねぇ、今何したの？」
ネプテューヌはそう聞いてきた。
「今のは、光の力を溜め込んで、それを暴発させたみたいなもんだ」
ま、嘘は言ってない。レーザーも光だからな。
「それが奥の手だったんだ。そんなのが相手じゃ私でも勝てないわ

よ」
「いや、コレはさっきみたいに発射するのに時間がかかっちまうんだ。だから、誰かと協力しないと難しい、ってわけ」
そう言うと、ネプテューヌは妙に納得していた。
「だから、私をスケープゴート（おとり）にしたのね」
……あ。

……SAVE

第5話　はじめてのクエスト、強力な武装（後書き）

クエストを無事に終わらせて帰ってきたケイス。
そんな彼に待っていたのは……。
次回、第6話　旅立ち（仮）

ちなみに、羽田山って本当にありますよ、えぇ。
まぁ、ハネダシティの元ネタの場所ではないですが。

それでは、また次回。

第6話　旅立ち（前書き）

すいません、投稿が遅れました。

野良ドラゴンの討伐を終えたケイス。

その帰り道……。

第6話　旅立ち

「そーいえばさー、ケイスー」
とぼとぼとプラネテューヌに歩いている最中、ネプテューヌが話しかけてきた。
「何？」
「プラネテューヌで働いてみる気、ない？」
はい？
プラネテューヌで働いてみる気って……。
「それって、仕官のお誘いですか？」
「あー、そんなに堅っ苦しいことじゃないんだけど、大体そんな感じー」
やっぱりそうか。
「とりあえず、辞退させてもらいますよ」
そう言うと、ネプテューヌは不思議そうな顔をして「何で？」と尋ねてきた。
「端的に言うと、今の世界を見て廻りたいから、かな」
「プラネテューヌで仕官しても、自由に行動できるよ？」
おいおい、そりゃ自由すぎやしないか？
「ネプテューヌはそう思っていても、周りはそうは思わないよ」
そんなフリーダムに行動できるのは、君だけだ。
「でも……。ネプギアも気になってるみたいだし……」
「そりゃ、気のせいだ。それか、アイエフを負かした人間として興味があるって程度じゃないか？」
ま、そんなもんだろうなぁ。
「それにさ、ちょっと嫌な予感もするんだよね」
「嫌な予感？」
「あぁ。何か悪いことが起こりそうな、そんな予感」
1年後に起るからな、アレが。

「そんなことないよー？私たち、女神がいればどうにかなるよ」
「だといいんだけどね」

「それにね」
「ん？」
「それに、プラネテューヌの女神たちに会ったんだ。他の女神にも会ってみたくなったんだよね」
ネプテューヌは、「そっかー」と言いながら先を歩いていった。
どうやら、諦めてくれ……
「じゃ、他の女神に紹介するから、それだったらいいよね！」
……なかったようだ。
「まぁ、紹介してくれるってのなら吝かではないけど、自分の足でいろんなところを歩いても見たいし」
「そっか。でも、他のところを廻って満足したら、プラネテューヌに来てくれる？」
……なんか、食い下がるなぁ。
「そのときに、プラネテューヌが一番いいと思っていたらね」
「うん、約束だよ？」
「あぁ」

プラネテューヌに段々と近づいてきた頃。
「そういえば、プラネテューヌに帰ったらどうするの？」
ネプテューヌがふいにそう聞いてきた。
「そういえば、ネプギアと一緒にクエストに行くって約束してたんだよなぁ」
別に嫌なわけではないが、なにやら気が重い。
「何で落ち込んでるの？」
「いや、ネプギアとのクエストどうしようかな、って」
そう言いながら、またため息をつく。
「簡単な、スライヌ退治とかでいいんじゃないの？」

「え？」
それは駄目なんじゃね？
「だって、ネプギアは多分ハイキング気分で行くと思うよ？私の妹だし」
いや、自分を基準にしないでくれ。
って、ちょっと待て。
「ってことは、このクエストはハイキング気分で受けたのか？」
「ギクっ」
まぁ、どうにかなったし別にいいよ、今さら。
「別にいいさ。でも、本当にスライヌ退治とかで大丈夫なのか？」
「そうだねー。お弁当持ってー、おやつと水筒を持って行くってのはいいかもねー」
ふむ、それならその手も考えておこう。

そんなこんなで帰ってきました、プラネテューヌ。
「おかえり、ケイスさん。それに、お姉ちゃんも」
俺たちを迎えてくれたのはネプギアだった。
「うう、ネプギアがケイスさんに取られちゃった気分…」
何を落ち込んでるんだ？ネプテューヌは。
「それで、どうだったの？ドラゴン退治は」
「あっさり終わっちゃったよ。ケイスさんの一撃で」
「へぇー、そうだったんだー……って、えぇ！？」
おぉ、ネプギアが驚いとる。
「え。でも。ケイスさんって剣と銃しか持ってないですよね？」
「それがねー……」
ネプテューヌがこっちを見てウインクする。
出せって事か。
「よっと。こんなもんがあったりする」
そう言って、ＬＣ５レーザーライフルを出す。
「聞いてないですよ、そんな武器」

「話してなかったしな」

「おお、女神様、ご無事でしたか」
ギルドにつくなり、ギルドマスターがそう話しかけてきた。
「うん、大丈夫だったでしょ？それじゃ、換金換金！」
そう言うと、ギルドマスターは店員に指示して、報酬を持って来させた。
「これが、今回の報酬、１００万クレジットだ」
そう言うと、テーブルの上にドカっと置いた。
うん、確かにそのくらいありそうだ。
「で、二人で山分けか？」
「ううん。独り占めで」
ちょ。聞いてないぞ、そりゃ。
そう思っていると、ネプテューヌはこっちを振り返りこう言った。
「ね、ケイスさんの独り占めでいいよね？」
「いや、やっぱり山分けだ」
二人で協力して討伐したんだ。そうしないと、公平じゃない。
「分かったよ。じゃ、半分は預からせてもらう（・・・・・・・・・）ね？」

で、５０万クレジットなんて大金持ってるわけには行かないんで、手元に少しだけ残して後は全部銀行に預けた。
「さて、と。あとは、ネプギアとの約束だけか」
そう言って、ネプギアのほうを見る。
「え？私ですか？あ……」
思い出したようだ。
そのときネプテューヌがちょっと離れたところから声を掛けた。
「ちょっと、ネプギア。こっちにちょっと来てー」

ｓｉｄｅ　ネプギア

うー、お姉ちゃん。なんて間の悪い。
これから、ケイスさんとクエストに行けるかもしれないっていうのに。
「何？お姉ちゃん」
私は極めて不機嫌そうな顔をしながらそう言った。
「えっとねー、ケイスさんとのクエスト、今回は我慢してくれないかな？」
やっぱり。
「何で？わたし、楽しみにしてたんだよ？」
「わかるわかる。だけどね……」
そう言うと、お姉ちゃんは急に声のトーンを変えてこう言ってきた。
「多分、今ケイスさんと一緒にクエストに行ったら、迷惑を掛けちゃうかもしれないよ、ネプギア」
「そんなことないよ！」
「ケイスさんは、すごい強いよ。だから、もっと強くなってから一緒にクエストに行ってもらったほうがいいと思うな、私は」
でも、クエストって強くなるために受けるんじゃないのかな？
「だから、約束をするんだよ。再会の」
「再会の？」
「うん、そう。そして、一人前になったネプギアを見てもらったほうが、ケイスさんは好きになってくれるんじゃないのかなー」
え、何でお姉ちゃん……。
「『何で分かるの？』って顔してるね。そりゃ分かるよ、姉妹だもの」
「お姉ちゃんの言う通りかもしれないね」
ありがとう、と言ってわたしはケイスさんのほうへ向かった。

ｓｉｄｅ　ネプギア　ＥＮＤ

「どうしたんだ？」
ネプギアがネプテューヌからやっと開放された。
何を話してたんだろうな。
「あ。えーとね、クエストの件だけど……」
「どうした？何か要望があるのか？」
「ひとつ、教えてください。ケイスさんはいろんな国に行ってみたいんですか？」
ネプテューヌに呼ばれてたのはこれか。
「まぁ、それに関しては否定はしない」
事実だしな。
「だったら、他の国全部廻った後に、またプラネテューヌに来てくれませんか？」
ネプテューヌめ、何か言ったのか？
「わたしは、今はまだすごい弱いです。それこそ、ケイスさんと一緒にクエストに行ったら迷惑を掛けちゃうかもしれない」
「いや、そんなことは……」
「だから、時間をください。ケイスさんに迷惑を掛けないくらいまで強くなっておきますから」
ネプギアの顔は、真剣そのものだった。
「わかった。だったらさ、俺もその約束を忘れないように」
そう言って、俺は1振りの剣を召還した。
うまくいってくれよ。
「出でよ、『バルムンク』」
一振りの剣が出てきた。そして、術式固定。
「これを、預かっておいてくれ」
「これを、わたしに？」
「うん、持っておいて欲しい。そして、それで戦えるようになっていてくれるとうれしいな」

「は……はいっ！」
ネプギアは、うれしそうにその剣を両手に抱えていた。

そして時間は2日ほど過ぎたある日。
「それじゃ、そろそろ行くよ」
おれは2日ほどかけて旅支度をしていた。
何しろ、地図も良く分からないので色々と頭に入れることが多すぎるからだ。
「うん。それじゃ、元気でねー？」
ネプテューヌは、元気に見送ってくれている。
それに、彼女には1つ頼みごとをしておいた。
他の国の女神に、俺が会いに行くということを伝えてもらうということだ。
「ネプテューヌ、アレのこと頼んだよ？」
「分かってるよ。みんなに連絡しておくから、安心しておいて」
それが一番心配なんだよ。
「ケイスさん、気をつけてくださいね」
ネプギアは、いつも通りに話しかけてくれた。
「あぁ、ありがとう、ネプギア。そっちこそ気をつけろよ？」
「もちろんです。ケイスさんと約束しましたから。強くなるって」
そう言いながら、ニコッと笑ってくれた。
「そうだね。それじゃ、剣の手入れも忘れずにね」
「はい、大事に預からせてもらいます！」
そう言いながら、腰に下げている件に目を向ける。
先日預けた『バルムンク』だ。
「それじゃ二人とも、元気でな！！」
そう言って、2人の女神と別れた。

さて、と。どこに行こうか。
やっぱり順番的にはルウィーかなぁ。

新たな国を目指し、俺は歩き始めた

……SAVE

第6話　旅立ち（後書き）

ルウィーを目指して旅をするケイス。
そこで、新しい出会いが待っていた。
次回、第７話　新たな出会い（仮）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

次回は、誰と出会うんだろうねぇ。
ケイス「俺が知るか！」
まぁ、順当に行けば、ルウィーの双子だろうなぁ。
ケイス「他にあんのか？」
そりゃ、ブランってこともあるかもしれないし、道に迷ってラステイションに行くこともありえるし。
ケイス「おい、後者は笑えねーぞ」
ケイス「そういえばさ、ネプギアに渡した『バルムンク』だっけ。アレって、出せたのか？」
ライトセイバーの電源が切れたら出す予定だったけど、初めのうちでそんなことあるわけないしねぇ。
それに、元々は渡す予定はなかったのだよ。
ケイス「だったら、どして」
いやぁ、後々のことを考えて。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

それでは、また次回。

幕間　設定のまとめ～プラネテューヌ編～　＋　駄話（前書き）

祝！初感想を頂戴しましたー。
励みになります。ありがとうございます。

と言うことで。
プラネテューヌ編が終わったので、
取得した武器や設定をまとめておきます。

幕間　設定のまとめ～プラネテューヌ編～　＋　駄話

【取得した設定】

爆炎斬鬼丸の技、能力、装備。

【装備】

転移の数珠、およびそこにしまわれていた武装の数々

転移の数珠：別次元から武装などを呼び出すためのアイテム。
似たものに、四次元ポケットや王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）がある。

転移の数珠での保管場所に、ケイスの武器も存在している。
転移の数珠は、ケイスの首にネックレスとして装備されている。

【技】

虚空雷撃剣

剣をすばやく横に薙ぎ、敵を切り捨てる技。
剣速が速いため、熟練の剣士でも反応ができないことがある。

【能力】

超高速並列思考

簡単に言ってしまえば、やろうと思えば右手と左手で別の相手と同時に戦える程度の能力。
そのため、きちんと「見ていれば」どこにどのような攻撃が来るかがすぐに分かる。
３話では、それのおかげでアイエフの攻撃を凌いでいた。

敵の察知

ただし、機械系のモンスターに限る

斬鬼丸自身が機械の塊なので、そのセンサー類で検知している。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――

ケイス「で、結局『斬鬼丸』って何者なんだ？」

「えと、前にも書いたと思うけど、ポプコムって雑誌に載ってた『リバーサー』って漫画に出てくる、機械剣士」

ケイス「で、何でそれをこの小説に入れようと思ったんだ？」

「カッコイイから。以上」

ケイス「おいおい」

「まぁ、3割くらい冗談。本当は、1回このネタで書いてみたかっただけ」

ケイス「ちょい待て。7割くらい真実じゃねーか」

「まぁね。それより、本当はその漫画に出てくるセンカってのとシュンってキャラの力を使いたいってのが本当のところ」

ケイス「で、出てくるのか？その2人は」

「もちろん。だって、3話で出したでしょ？それぞれの大陸に1人ずつ仲間がいるって」

ケイス「そこにつながるのか。…あれ？そういえばもう一人の仲間ってのは？」

「あぁ、ダイクっていうさえないおっさん」

ケイス「えー」

「…の姿をした世界最高の魔導師」

ケイス「さっきの『えー』を返せ」

「コイツはコイツですごいんだよ。魔法に強けりゃ機械にも強い。んでもって、ある装備品のおかげで魔力の消費がほとんどナシ」

ケイス「ちょ、おまっ。魔法戦に関しては最強キャラになるじゃねーか」

「そだね。けど、コイツには弱点があってな」

ケイス「ほうほう。で、その弱点とは？」

「女に弱い」

ケイス「……弱点っていうのか？それ」

ケイス「そういえばさ、前回（６話）の最後に俺、バルムンク出して、ネプギアにあげてたけどさ」

「ほいほい」

ケイス「いつ出せるようになったんだ？」

「野良ドラゴン倒した後、レベルが上がって」

ケイス「え？」

「ちなみに現在、数値の上では君はレベル３０くらいだから」

ケイス「他には、何が出せるんだ？」

「とりあえず、何でも。使った回のあとがきにでも説明を書くさー」

ケイス「適当だなぁ」

「そういえば、書くのを忘れてた」

ケイス「何を」

「この世界の設定」

ケイス「いやいや、設定はあるだろ？原作があるんだし」

「いやいや。ここ、原作の４年前。女神たちがマジェコンヌ退治に出かける１年前の話だから」

ケイス「まぁ、そりゃそうだけど」

「ちなみに、1～6話で何か不思議に思わなかった？」

ケイス「何を」

「ん。ネプギアが女神化しないこと」

ケイス「あ、そういえば

「ということで。現時点では、女神候補生は女神化できませんってことで」

ケイス「何で？」

「いやね、不思議に思ってたんだよ。何でネプギアだけマジェコンヌ退治に連れて行ってもらえたのか。俺の中の答えでは、原作の3年前では女神候補生のうち女神化できるのはネプギアだけだったんじゃなかろうかと」

「ルウィーの2人についてはミナが止めていたって可能性もありえるけどな」

ケイス「まぁ、あり得るなぁ」

「ということで、そんな設定で行きます」

幕間　設定のまとめ～プラネテューヌ編～　＋　駄話（後書き）

設定を書き忘れていたので、急遽こんな形で出しました。

今後は、何か新しい要素が出たら、あとがきに書くようにしなくては。

第7話　新たなる出会い（前書き）

プラネテューヌでの事を終えて、ルウィーに向かっているケイス。
ここでは、どのような出会いが待っているのか

第7話　新たなる出会い

「あぁ、ルウィーはまだかー」
俺はそう言いながらプラネテューヌとルウィーを結ぶ街道を歩いていた。
気候的には、どちらかと言えば寒いに属するだろうか。
雪が降っているため、寒いのは当たり前なわけだが。
そのため、先ほど立ち寄った街でコートを買い、それを羽織っている。
「マスター、無理をせず車で行ったほうがよかったのでは？」
そう言って、胸ポケットから顔を出すアーンヴァル。
え？コイツがどこから来たかって？
コイツは、斬鬼丸の装備の一部を使って組み上げた、俺オリジナルの兵装。
姿形、声まで武装神姫のアーンヴァルと一緒だ。
しかも、大きさも１５ｃｍくらいときている。
ただ、彼女が装備できる兵装が全くないため、素体状態のままだ。
「いやいや、歩いていったほうが、生の情報を集めやすいだろ？」
それに、原作の誰かに会えても不思議じゃないしな。

ｓｉｄｅ　？？？

ちょっと街から離れたところまで来ちゃったなぁ。
それに、目的のキノコもたくさん取れたし。
「そろそろ、教会にかえろっか。ミナちゃんも心配してるだろうし」
「……うん」（コクコク）
ミナちゃんには、キノコを採ってくるとしか言ってないから、早く帰らないと。
じゃないと、また『そうさくたい』を組織してわたしたちを探しに

行きかねない。

そう思った時だった。
ちょっと離れたところから、
『ギュイーン、ガション、ガション』
と機械の動く音が聞こえた。
わたしたちは、咄嗟に岩陰に隠れてその音の主を探した。
前に、お姉ちゃんに教えてもらった、怖いモンスターの一体。
たしか、ＤＳＴＴって名前だったと思う。
だけど、あのタイプのモンスターは、国際展示場の方にしかいないって聞いてたのに。
「どうしよう、ロムちゃん」
「……こわい」（びくびく）
ほんとに、どうしよう。
教会に帰るためには今隠れてるところから出なくちゃいけないし、
出たらあのモンスターに見つかっちゃう。
そんな時。
「くちゅん」
ロムちゃんがかわいいくしゃみをした。
『ピピピピピッ、ギュイーン、ギュイーン』
間違いなく、見つかっちゃったみたい。
ＤＳＴＴは、確実にわたしたちのいるところに向かってきているようだった。

ｓｉｄｅ　???　ＥＮＤ

何か、ひっかかる。
「どうしたんです？マスター。変な顔をして」
これは、突っ込まないといけないんだろうか。いやいや、何かそうも言っていられない状態のような気が。

「いや、機械の探知に何かが引っかかったみたいなんだ。アーンヴァル、お前の方の探知に何か引っかからないか？」
「えっとですね、……あ。人が二人近くにいるようです。大きさから言って子供のようですね」
「方角と距離は？」
「東に５００メートルと言うところでしょうか」
うん、大体あってる。
ん？何か、移動速度が速くなったな。移動方向は南というところか。
「あ、マスター。先ほどの反応ですが、片方だけが動き出しました。東方向へ」
「もう片方は？」
「そのままとどまっています」
あ、こっちの反応も、南東へ方向を変更した。
と言うことは、この二人が危ない！
俺はそこから東の方角へ駆け出した。

ｓｉｄｅ　？？？

どうにかして、ロムちゃんから引き離さないと。
そう思って、わたしは隠れていた岩陰から飛び出した。
「モンスター、わたしはここよー、追いつけるもんなら追いついてみなさい！」
わたしはそう言うと、一目散に走り出した。
そんなに移動速度の速そうなモンスターじゃないし、楽勝よね。
でも、わたしの予想は悪いほうに裏切られた。
モンスターは飛行形態になってわたしのほうに迫ってきた。
そして、目の前にモンスターが来てしまった。
もうだめっ。
わたしはそこで目を閉じた。

ｓｉｄｅ　？？？　ＥＮＤ

やべぇ。
目の前では女の子が走っていて、それにロボットが飛行形態で近づいていた。
こうなったら、こっちに注意を引き付けるか。
そう思い、アルヴォＰＤＷ１１を呼び出す。
そして、女の子に当たらないように、しかも近づきながらトリガーを引く。
キンキンキンッと弾かれてしまったが、注意を引き付けることはできたようだ。

ｓｉｄｅ　？？？

目を閉じて衝撃に備えていたんだけど、何も来る気配がない。
さっき、なにか金属音が鳴ったみたいだけど、どうしたんだろう。
わたしはおそるおそる目を開けてみた。
そこでは、さっきのモンスターと見たことのない男の人が銃で応戦していた。
「やっぱ、銃じゃ駄目か」
そう言って手に持った銃が消え、代わりに剣が姿を現す。
「とりあえず、これでどうだっ！」
そう言ってＤＳＴＴに一撃を加え、後退させた。

ｓｉｄｅ　？？？　ＥＮＤ

お。目を開いたな。
「よぉ、無事か？」
「うん、どうにか無事だけど。アンタ誰？」
うぉっ、キツイお言葉。

「俺はケイスってんだ。よろしくな」
「わたしは……って。アイツが何か撃ってきそうよ？」
そう言われてロボットのほうを見ると、何かチャージをしていた。
「アーンヴァル、電磁フィールド展開だ」
「イエス、マスター」
アーンヴァルはそう言うと俺たちの前にフィールドを張った。
ロボットは、何かビーム方のようなものを撃ってきたが、電磁フィールドに阻まれ、俺たちに命中することはなかった。
もちろんその後、剣のみで倒してやりましたよ、えぇ。

さて、と。
「そういえば、誰かもう一人いたんじゃないのか？」
そんなことを言っていると、こちらに誰かが走ってくる足音がした。
足音がするほうを見てみると、ロムが走ってきていた。
そして、ラムに抱きついていた。
「……ラムちゃん、大丈夫？」
「うん、この人がアイツをやっつけてくれたから」
「……ら」
「ら？」
「ラムちゃんを……まもってくれて……ありがとございました」
そう言って、ロムは深く頭を下げた。
顔を上げたとき、顔が真っ赤だったが、噛んだのが恥ずかしかったんだろうか。
こうして、俺はルウィーの女神候補生と出会った。
……まぁ、本人たちはまだ明かしていないが。

……ＳＡＶＥ

第7話　新たなる出会い（後書き）

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

「はい、というわけでルウィーの双子女神候補との出会いの話でした」
ケイス「そういえば、何でアーンヴァルが出てきてるんだよ」
「ということで、アーンヴァルの説明を下に」

アーンヴァル
原作（リバーサー）では、バトルユニットという名称で出てきています。姿は、ダースベーダーのヘルメットのみ見たいな感じ。型番はど忘れしましたが、愛称は『ちぢこ丸』『かしこ丸』だった記憶が。
本当は原作のままの姿で出す予定だったのですが、諸般の事情で武装神姫のアーンヴァルの姿となりました。

能力としては、索敵能力および電磁フィールド（いわゆるバリアっすね）を張ることができる。
人語を理解し使用することができるため、コミュニケーションをとることができる。

「まぁ、今のところは物理攻撃用のバリアを張る係って感じかな」
ケイス「かわいそうに。それだけのために……」
「物語が進むと、実はちょっとしたキーパーソンになる」
ケイス「おお」
「……といいなぁ」
ケイス「おぃ！」
――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――――――――――

それでは、

次回、第8話　そしてルウィーへ（仮）

でまたお会いしましょう。

第8話　そしてルウィーへ（前書き）

成り行きでロムとラムを助けたケイス。
さて、この後彼はどんな行動を取るのだろうか。

第8話　そしてルウィーへ

「へぇ、ロムちゃんとラムちゃんって言うんだ」
俺は今、ロムちゃんラムちゃんと一緒に歩いている。
彼女たちがルウィーへ帰る、というので護衛を買って出た次第だ。
「うん、わたしがラムよ。よろしくね」
「……わたしが……ロム。……よろしく（ボソボソ）」
「俺は、ケイスって言うんだ。よろしくな」
「うん。よろしくされてあげる」
「……うん」
あー、原作通りにラムちゃんはお転婆、ロムちゃんは無口って言うか恥ずかしがり屋か。

「そういえば、ケイスはルウィーに何をしに来たの？」
「何をしに、というか。ちょっとルウィーに行ってみようと思ってな」
まぁ、本当は力を手に入れるためだが、表向きはこんなもんだろ。
「それに、ルウィーの女神様にも会ってみたかったしな」
そう言うと、ロムとラムは顔を見合わせてニコニコ笑った。
「ケイス、アンタ運がいいわよ。わたしたちが、このルウィーの女神なんだから」
「……正確には、女神候補生」
うん、知ってる。
「へぇ。ってことは、今の女神様の妹なのか。ロムちゃんとラムちゃんは」
そう言うと、二人そろって「うん！」と答えてくれた。
元気のあることは、良いことだ。
「でもね、おねーちゃんは重い病気にかかってるって、ミナちゃん

が言ってた」
いやいや、それは初耳だぞ。
「……うん、なおりづらい病気だって、言ってた」
「もしかして、今もベッドで横になってるのか？」
「ううん。ふだんは大丈夫なの。でも、たまに『ほっさ』が起こるって言ってた」
「……そのときには、近づいちゃいけないって、ミナちゃんに言われた」
あ。もしかして……。
「ちなみに、なんて病気って言ってた？」
「「ちゅーにびょう」」
やっぱりか。（笑）
「うん、それは発作が起こってるときには近づかないほうがいいな」
主に精神的な意味で。
「そういえば、さっき出てたミナちゃんって誰？」
「ミナちゃんは、ルウィーの教祖なの」
「…教祖なの」
「でも、怒るとすっっっごく怖いの」
「……こわいの（びくびく）」
「でも、すごい優しいの」
「……うん、やさしいの」
あぁ、確かに怖いだろうなぁ。あんな黒いオーラまで出るような怒り方は。

ｓｉｄｅ　ミナ

ロムちゃん、ラムちゃんがなかなか帰ってこない。
『きのこをとりにいってくるねー』
と言って出かけてからすでに数時間。
すでに帰ってきてもおかしくない時間なのに、なかなか帰ってこな

い。
「ブラン様、あの二人遅くないですか？」
私は、本を読んでいるブラン様にそう問いかける。
「……大丈夫、多分寄り道をしているだけ」
ブラン様はそう答えるけど、私は気が気じゃない。
「やっぱり、遅いです。もうそろそろ日も暮れるというのに、一向に帰ってこないじゃないですか」
なんと言われようと、心配なものは心配なのだ。
「……だから、大丈夫。そのうち、元気に帰ってくるわ」
「ブラン様は心配じゃないんですか！？」
私がそう激昂すると、ブラン様は読んでいた本を閉じてこう言った。
「……心配に決まってる。でも、あの子達のこと、少しは信用してあげて」
ブラン様がそう言った直後。
「ただいまー」
と元気な声が教会の中に響いた。
「ほら、ね」

ｓｉｄｅ　ミナ　ＥＮＤ

ラムちゃんが元気よく「ただいまー」と言って教会の扉を開けて入って行った後を、小さく「……ただいま」とビクビクしながらロムちゃんが入っていく。
怒られちゃうのかな、二人とも。
その後に続いて、俺が「失礼します」と言って教会の扉をくぐった。
入っていったら、すでにミナによるお小言が始まっていた。
もっと早く帰ってきなさい、とかあまり遠くに行かないように、とか言われているようだった。
そして、ひとしきり怒ったミナが顔を上げたとき、俺と目が合ってしまった。

「あ、もしかして見られていました？お見苦しいところをお見せして申し訳ありません」
そう言って、俺に頭を下げてきた。
「この教会の教祖、西沢ミナと申します。失礼ですが、何の御用でしょうか」
「申し遅れました。私はケイスと申します。冒険者をやっております」
そう言うと、ミナさんは何か思案し始め、「あ」と声を上げる。
「もしかして、プラネテューヌから来た方ですか？」
「え、あぁ、はい。まぁ、一応」
「そうでしたか。プラネテューヌでのご活躍、聞き及んでおります」
活躍って何だよ。
「活躍って言うと、わたしたちも助けてもらったんだよ、ミナちゃん」
「……うん、かっこよかった」
「助けてもらった！？」
「そうよ。モンスターに襲われているところを助けてもらったの」
「……助けてもらった」
おい、ロムちゃんにラムちゃんよ。
何か、あっさりしすぎじゃね？
「えぇぇっと。本当に、本当にありがとうございました」
ミナさんはワタワタしながら俺に何回も頭を下げてくる。
うわぁ、この人本当に真面目なんだなぁ。

「ロム、ラム、二人はちゃんとお礼した？」
そんな声がしたほうを向くと、ブランがロムちゃんとラムちゃんの頭を撫でながら、話をしていた。
「うん、もちろん！」
「……お礼、言った」

「……そう」
そう言ったあと、ブランは俺のほうを向いてこう言った。
「私からもお礼を言わせてもらう。妹たちを助けてくれて本当にありがとう」
そう言って、柔らかな表情で微笑んだ。
「私はルウィーの女神。普段はブランと名乗ってる。よろしく」
そう言って、右手を差し出してきた。
「冒険者のケイスと言います。お会いできて光栄です」
俺もそう言いながら右手を差し出し、握手をした。

……ＳＡＶＥ

第8話　そしてルウィーへ（後書き）

お前、礼儀正しいのな。

ケイス「いや、そりゃこの世界で生きていかないといけないんだから、当然っしょ」

まぁ、そうかもな。

そういえば、今回アーンヴァルが全然出てこなかったな。

ケイス「アンタが前回あれだけ脅かすから、出て来れなかったんじゃないのか？」

あー、そんなこともあったねぇ。

アーンヴァル「『そんなこともあったねぇ』じゃないです！（ドゴッ）」

ケイス「おい、あんばる。適度にしとけよ？」

止めろよ。

あんばる「って、何で私の名前が『あんばる』に？」

いいじゃん。ここ、本編じゃないんだし。

あんばる「よくねーです」

それじゃ、次回予告いくよー。

あんばる「また今回も無視っすか」

ブラン「次回、『あぁっ、女神さまっ』」

すまん、ブラン。マジでそれはやめさせてくれ。

ブラン「えー」

えーじゃない。

次回、「女神と明るい食卓と大事件（仮）」でまたお会いしましょう

ケイス「そういえば、なんでいつも（仮）がついているんだ？」

ん？気分によって変わるかもしれないから。

ケイス「んなことで変えるなー」

第9話　女神と明るい食卓？（前書き）

ロムとラムを連れてルウィーの教会へ来たケイス。
ロムとラムの怒られイベントが終わった後……。

第9話　女神と明るい食卓？

「あの、よければ今日はもう遅いので、教会（ここ）で寝泊りされませんか？」
教祖（ミナさん）がそう持ちかけてきた。
今は夕刻だから、そこまで遅い時間ではない。
けど、さすがに今から街で宿を取るには遅すぎる時間だった。
それに、プラネテューヌを発ってからずっと野宿だったため、ありがたい申し出だった。
「お言葉に甘えさせていただきます」
俺はそう言うとミナさんに頭を下げた。
「それに、この二人を助けていただいたんですから。教祖として、人として当然のことをしているだけです」
彼女はそう言って、祭壇の手前の扉から出て行った。
「腕によりをかけて夕食を作りますので、楽しみにしていてくださいね」
と言い残して。
ロムとラムは、ミナを追いかけるように、同じ扉から出て行った。
夕食の準備を手伝うのか。
感心感心。

そんなこんなで気がつけば、教会の中には俺とブランが残されていた。
ブランはあまり饒舌な方ではない―（というより、どちらかと言うと無口だろう）ため、物静かな空気が漂っていた。
「……座ったら？ここには、椅子がたくさんあるから」
先に声を発したのは、ブランだった。
「あ、はい。失礼します」

そう言いながら、俺は椅子に腰を下ろすのだった。
俺がそんなことをしているときも、ブランはずっと本を読んでいた。
どんな本を読んでいるのか、非常に興味がある。
「あの……。先ほどから、熱心に何の本を読まれているんですか？」
俺がそう言うと、ブランは本から目を離しこちらを見てきた。
そして、本を持ち上げ俺のほうへ見せた。
「これ」
本の表紙にはこう書かれていた。
『家族との団欒。夕食時の会話１００選』と。
苦労してるんだなぁ、ブランも。

俺は、ブランから少し離れた場所に座ることにした。
……邪魔しちゃ悪いからな。
そして、胸ポケットからアーンヴァルを出してやる。
「アーンヴァル、すまん。もう少し早く出してやればよかったな」
「酷いです、マスター。５日間くらい外に出ていなかったような気がします」
気のせいだ、アーンヴァル。
「それで、どうしたんですか？マスター」
「いや、今の武装を確認しておこうと思ってな。お前は、転移の数珠の向こう側が分かるだろ？」
「はい、それはもちろん。そういう設定になっていますから」
設定言うな。
「で、俺の戦い方に合う武器を見繕って欲しくてな」
いつまでも、Ｍ４ライトセイバーとアルヴォＰＤＷ１１だけでは心許ない。
そこで、アーンヴァルに選んでもらおうと言う寸法だ。
「そうですねぇ」
そう言って、アーンヴァルは押し黙った。

おそらく現在武装の検索をしているのだろう。
「剣に関しては、ギュリーノスかレーヴァテイン、銃に関してはさほど変わりませんが、手数と言う意味ではアルファピストルなどが良いかと。または、今のアルヴォＰＤＷ１１を光学武装に改造するか、でしょうか」
へぇ、結構いいのが出てきたじゃないか。
「あれ？この武装は何でしょうか。私の中のＤＢに入っていないものがあります」
「お前が把握していない武装？そんなことがあり得るのか？」
「いえ、通常ありえません。それにしても、何でしょうか。この、『種別：魔法の杖』というものは」
「魔法の杖？」
「はい、武装の情報を調べたらその単語が出てきました」
一体なんだろうか。
そのうち、呼び出してみよう。

「おねーちゃーん、ケイスさーん、ごはんできたってー」
ラムちゃんが教会の中に入ってくると、大きな声でそう言った。
「ラム、そんな大きな声で言わなくても聞こえる」
「そうかなー。だって、この間聞こえてなかったみたいだったし」
まぁ、本を読んでいると聞こえないこともあるかもな。
「……ケイスさん、ごはん、たべよ？」
俺の近くには、ロムちゃんが来ていた。
「そうだね、それじゃいこうか」
そう言って立ち上がり、ロムちゃんの頭を撫でてから扉へ向かおうとした。
そういえば、どこにどう行けばいいんだろうか。
そう思っていると、ロムちゃんは俺の手を握って、「こっち」と言って引っ張っていった。

ｓｉｄｅ　ラム

あ、ロムちゃんが頭を撫でられて笑顔になってる。
あんな笑顔、私にもあまり見せてくれないのに！

あのケイスって人、どこに行けばいいのか分からないみたい。
しょうがない、案内してあげようか。
って、ロムちゃんが手を握って連れて行った！？
あんなに積極的なロムちゃん、見たことないよ！？
うぅ、なにがあったんだろ……。

「おねーちゃん、私たちも早く行こ」
「ラム、分かったからそんなにせかさないで」
おねーちゃん、早く！
早くしないと、ロムちゃんが取られちゃう！！

ｓｉｄｅ　ラム　ＥＮＤ

そんなこんなで食堂にて夕食の時間。
今日はロムちゃんとラムちゃんが取ってきたきのこを使ったきのこ鍋だった。
俺の横にはロムちゃんが座っていて、小さな体を一生懸命使って鍋の具を取ってくれている。
「んしょ。これ……と、これ。あと……これ、も」
色々と取ってくれているのはうれしいんだけど…。
ラムちゃんからの視線が痛い。
視線で人が殺せるなら即死って感じで。

「……はい、ケイスさん。どうぞ」
そう言いながら色々と盛り込まれた器を渡された。
うん、鍋のお代わりはしなくて済みそうだな。

みんなに鍋が行き渡り、ようやく夕食開始。
「いただきます」
そう言って、みんなでごはんを食べ始めた。
「うん、おいしいです」
「そうですか。今日はロムちゃんとラムちゃん二人とも手伝ってくれましたからね」
「そうよ。私たちが手伝ったんだから、おいしいに決まってるじゃない」
「いっしょうけんめい、お手伝い、した」
「そうか、そりゃおいしいはずだよね」
……おかしい。
ここにいる中で一人だけ会話に参加してこない。
もちろん、ブランさんだ。
さっき、読んでたあの本の知識を生かすのは今ですよ。
そう思い、ブランさんのほうを見てみた。
……一心不乱に食べていた。
だめじゃん。

夕食を食べ終えた後、ブランさんが話しかけてきた。
「ケイス。明日、ヒマ？」
「まぁ、暇っちゃ暇ですが」
「ちょっと、付き合って欲しい」
「分かりました」
会話が終わると、ブランさんは立ち上がり、「自室にいるから。用

があったら来て」と言って食堂から出て行った。

……SAVE

第9話　女神と明るい食卓？（後書き）

ケイス「タイトルに偽りがあるが」

いや、しょうがないだろ。こうなっちゃったもんは。

ケイス「やりようはあったんじゃないのか？」

まぁね。

本当は、ブランが嬉々として話をしているって話にしようとしたんだが……。

ケイス「したんだが？」

俺の中のブランはそう一筋縄じゃいかなかった。

ケイス「それに、前回の予告にあった「大事件」も削除されてるし」

さすがに自分の中で、いつもの2倍くらいになりそうだったんで分けた。

ケイス「そういえば、今回新しい武装が出てきたな、言葉だけだが」

うむ。と言うことで、説明行きます。

ギュリーノス

種別：大剣

特徴：基本は金属の剣だが、刃の部分がライトセイバーのようにエネルギーでコーティングされている。

レーヴァテイン
種別：小剣
特徴：炎の剣。ライトセイバーが斬る剣なら、これは溶かして断つ剣。

アルファピストル
種別：ハンドガン
特徴：装填数が多いが威力がアルヴォＰＤＷ１１には劣る。が、耐久力が高いため別用途で使用することを検討中。

アルヴォＰＤＷ１１（エネルギー弾モード）
種別：ハンドガン
特徴：威力はアップするが、エネルギーの消費量がぐっと増える。コレを使うのであれば、ライフル銃のほうがはるかに効率的かも知れない。

こんなところか。

ケイス「で、今回出てきた「魔法の杖」って、次回はちゃんと出てくるのか？」

うん、その予定。

ケイス「ってことは俺のパワーアップか」

パワーがアップするか分からないけどね。

ケイス「え、」

それでは次回、「大事件発生（仮）」でまたお会いしましょう

ケイス「また（仮）ってつくのな」

第１０話　大事件発生（前書き）

ケイスはルウィーの教会で夕食をご馳走になっていた。
そして、その日の宿も提供してもらっていた。
そんな夜のこと。

第１０話　大事件発生

ｓｉｄｅ　？？？

えぇと、どこだったかしら

私はそう思いながらとあるダンジョンの中を歩いていた。

たしか、この辺りだと思ったのに。

「どなたか、いらっしゃいませんか？」

私は誰かに向かってそう声をかけた。

だが、通常は誰も答えるはずがない。

先ほどまで存在していたここのモンスターもすべて倒してしまったし。

ま、私がここから出れば復活するんでしょうけど。

「誰じゃ？こんな時間に」

ふと、そんな声がした。

……探し物、ゲット。

「いえ、道に迷ってしまったんですよ、『ゲイムキャラ』さん」

「ほう、こんな時間に辛かろう。わしが案内してやりたいのは山々じゃが、如何してもこの地を離れるわけに行かなくてのぅ」

いえいえ、良いんですよ。貴方はそこにいれば。

むしろ、そこから動かないから助かります。

「大丈夫ですよ、もうわかりましたから。だ・か・ら」

そう言って私は得物を振り上げる。

「そこで粉々にしてあげますッ」

そして、振り下ろす。

バキンッ、と音を立ててゲイムキャラは割れた。

「……お主、…何者、じゃ？」

あぁ、まだ生きてるみたい。しぶといですね。

「…まぁ、いいでしょう。私は、『マジェコンヌ』に与するもの、とだけ言っておきます」

言い終わった後、私はゲイムキャラだったものを粉砕した。

「さて、これであのキラーマシンの封印を解きました。どう出ますか、ルウィーの女神」

ｓｉｄｅ　？？？　ＥＮＤ

次の日の朝。

まぁ、昨日は旅の疲れもあったのか、夕食の後に部屋に案内されそのまま寝てしまっていた。

何回か部屋をノックされたような気はしたが、疲れには勝てず…。

そして、教会のほうに行ったのだが、ミナさんが何やら慌しく動いていた。

「おはようございます、どうしたんですか？」

「ケイスさん、ちょうどいいところに」

そう言って、ミナさんが駆け寄ってきた。

「実は、『世界中の迷宮』と言うところで、大きなモンスターの発生が確認されて」

「世界中の迷宮？」

「あ、そうでしたね。世界中の迷宮と言うのは、ここから北西にいったところにあるダンジョンです」

「そこでモンスターが発生した、と」

「えぇ。すでにブラン様にもお伝えして言ってもらっていますが、念のためケイスさんにも行っていただけたら、と思いまして」

まぁ、モンスターを倒せるのは限られてるからなぁ。

「俺でよければ、いくらでも協力させてもらいます」

別に断る理由もないし、それに今日はブランさんと一緒に行動すると約束してたしな。

「ありがとうございます。それで申し訳ないのですが、どのくらいで出発できますか？」

「そうですね、すぐにでも行けますよ」

「それでは、お願いできますか？」

「はい」

そう言って、俺は教会から出て行こうとした、のだが。

「すいません、何か腹に入れるもの、ありますか？」

……あまりにもカッコ悪かった。

そのあと、ロムちゃんラムちゃんにご飯を用意してもらったのだが、ロムちゃんと帰ってきたら遊ぶ約束を強引に取り付けられた。

だってなぁ。「約束しないと朝ごはん抜きです！」って言われて、じゃぁいいやと言うと目をウルウルさせて泣きそうになるんだから。

あれは、反則だよ。

そんなこんなで世界中の迷宮。

来たんだが、何か嫌な予感しかしねぇ。

だってさ、さっきから機械の駆動音が聞こえてくるんだぜ？

世界中の迷宮と機械の駆動音、って言ったらキラーマシン（あれ）しかないだろ。

入ってみたら、やっぱりだった。

で、ブランさんは苦戦してるわけだ、物理で殴る系だし。

「ケイス、いい所に来たな。あっちのやつらを頼むぜ」

で、「うぅおりゃぁぁぁ」と言いながらキラーマシンの群れに突っ込んでいった。

ブランさん、やっぱり堅いなぁ。

ま、任されたとあっちゃ逃げる訳にゃ行かないっしょ。

「アーンヴァル、レーヴァテインを出してくれ」

「了解です、マスター」

次の瞬間、俺に右手にレーヴァテインが現れた。

それじゃ、行くぞ。

ｓｉｄｅ　？？？

見たことない人が「キラーマシン」と戦ってますね。

かわいそうに。人間には敵うはずが…。

あら。倒されてしまいましたね。

それも、随分あっさり。

ちょっと、興味が湧きました。

「ねぇ、貴方」

ｓｉｄｅ　？？？　ＥＮＤ

「ねぇ、貴方」

上から、そう声が聞こえてきた。

俺が上を向くと、銀髪の少女が空中に佇んでいた。

「誰だ、君は」

少なくとも原作にはこんなキャラは出てきていない。

銀髪で黒いゴスロリ衣装を着ている奴なんて。

「あら、怖い。でもそういう場合は男性から名乗るものではなくて？」

今って、そういう場面でしたっけ。

とりあえず無視を決め込み、キラーマシンを倒すことに専念しようと思ったのだが。

「…女性を放っておくなんて、感心しませんわね」

そう言いながら、何か呪文のようなものを唱えはじめた。

そして、その力を解き放つ。

「雷（いかずち）よ、降れ」

彼女がそう言うと、雷が俺めがけて降り注ぐ。

「アーンヴァル、電磁フィールドを高速展開！」

「了解です！」

アーンヴァルによって電磁フィールドが生成された、が。

「うがぁぁぁぁっ！！」

電磁フィールドを素通りし、そのまま俺に直撃した。

「アーンヴァル、大丈夫か？」

「ど、どうにか、ですが」

そうか、向こうは魔法だった。これじゃ、止められるはずがない。

「あら、あっさり終了ですか？少しは耐えていただかないと」

そう言いながら、第2波を用意しているようだ。

何か、手はないか？

そういえば昨晩、アーンヴァルが言っていたな。

転移の数珠の領域内に魔法（マジックワンド）の杖があったって。

「アーンヴァル、魔法（マジックワンド）の杖に武装変更を頼む」

「え、マスター。魔法が使えるんですか？」

「いや。でも、魔法（マジックワンド）の杖だったらどうにかなるかと思ってな」

そう言うとレーヴァテインが右手から消えた。

「マスター、今先ほどの攻撃であれば私もマスターもあと2、3回が限度です。正直、それ以上は命の保障ができません」

「上等！」

そして、魔法の杖（マジックワンド）が召還された。

ん？どこかで見たことあるぞ、これ。

「これは…閃光の杖か！」

そう言った次の瞬間、周りの時が止まった。

「当たり、か」

「どうやらそのようですね」

「ダイク・ザ・ウィザードか」

「私をご存知でしたか」

この人はダイク。リバーサーという物語で、辺境の大魔道師とまで呼ばれた人だ。

「まぁ、ね。それで、貴方も俺に力を貸してくれるのか？」

「えぇ、神との契約ですし、それに貴方が面白そうな方だったので」

「面白そう？」

「えぇ。力に溺れず、力を過信せず、あくまで自然に流れているところが」

「アンタ、やっぱりそういうところが『先生』なんだよ」

こうしているうちにも、俺の中にダイクの知識が流れてくる。

この人の外見からは、想像し得ない禁呪もたくさんあるんだなぁ。

「さて、これで終わりのようです」

「あぁ、ありがとう、先生」

「また会う機会があれば、そのときに色々と話したいものですね」

「はい、そのときには是非」

その言葉に、先生はうなづいてくれた。

それ以降、先生（ダイク）の声は聞こえなくなった。

そして、また世界に時が戻っていく。

さて、と。

「マスター、反撃の準備はよろしいですか？」

「あぁ、もちろん！」

次は止めることができる、はず。

「それでは、こちらから行かせていただきます。雷（いかずち）よ、穿て」

空中にいる少女から、そのような声が聞こえた。

そして、雷が俺に向かってくる。

「…魔力壁（ロン・ウォール）」

俺は左手を掲げて、魔法（ちからあることば）を唱えた。

次の瞬間、その左手を起点として俺を守る魔力壁が形成される。

これがロン・ウォールだ。

そして、その魔法で雷は止められた。

「なっ…！」

「さて、反撃開始だ」

……ＳＡＶＥ

第１０話　大事件発生（後書き）

ケイス「大事件過ぎるんですが」

というか、この事件がやりたいがために女神たちの出撃の１年前からの物語にしたんだから、しょうがない。

ケイス「お前か、お前が黒幕なのか」

どうどう、落ち着け。
俺が黒幕なわけがない。

ケイス「にしても、あのゴスロリ少女は何者だ？」

あぁ、彼女の名前くらいだったら次回明らかになるかも。
正体は、まだまだ先。

ケイス「ちなみに、あいつが放った雷は何で電磁フィールドで止められなかったんだ？」

それは、電磁フィールドでは、魔法は止められないから。

ケイス「で、やっと俺がパワーアップしたな！」

うん、やっと魔法を使えるようになったねぇ。
とはいえ、あまり多用はしないと思うよ。

ケイス「えー」

基本、君は剣士＋銃士なんだから。

ケイス「まぁ、そうだな。今までがそうだったから急に魔道師になれって言われても困るからな」

だから、差し詰め魔法剣士＋魔法銃士ってところか。

とりあえず、今回出てきた人物＋技の説明

人物

銀髪のゴスロリ少女
名前は決まってますが、上で書いたとおり次回で。
とりあえず、魔法重視の魔道師です。

ダイク・ザ・ウィザード
本編で書いたとおり、リバーサーと言う作品に出てくる主人公の仲間。
かなりの知識人で、今回は魔法以外の知識もケイスに受け継がれています。
ちなみに、持ちネタの禁呪がいくつかありますが、全部命に関わるので封印。

武装

閃光の杖
高速詠唱の補助、詠唱の代替、魔力ブーストが主な機能。
魔力ブーストはケイスの場合、元々の魔力量はそんなに大きくないのですが、魔力量が数十倍に跳ね上がって認識される。そのため、本来の魔力では行使不可能な魔法でも使用することができる。

ただし、閃光の杖を装備している場合に限る。

魔法

ロン・ウォール（Ｌｏｎｇ Ｗａｌｌ）
魔力で作成した障壁、と言ったほうがわかりやすいですかね？
基本的に、魔力が介在した攻撃を防ぐことができる。
その強さは魔力量に左右される。

それでは次回、「事件の収拾（仮）」でまたお会いしましょう

ケイス「……突っ込まないぞ」

※とりあえず今回、実験的に行間を1行空けてみました。

第１１話　事件の収拾（とりあえず）（前書き）

世界中の迷宮でキラーマシンが大量発生。
その収拾を行っていたときに、銀髪の少女から雷撃の攻撃を受ける。
１度目は受けてしまったケイスだったが、ダイクの力を吸収したこ
とにより２度目の攻撃は防御成功。
さて、ここからどうなることやら。

第１１話　事件の収拾（とりあえず）

反撃開始とは言ったもののどう反撃するか。

俺は悩んでいた。

とりあえず地面にいるのであれば、このまま攻撃してしまえばよい。

だが、今の相手は空中にいる。

だったらどうするか。

……地面に下ろすか。

俺は、閃光の杖を自分の前に掲げた。

ｓｉｄｅ　？？？

雷撃を防がれた後、下の彼に動きはありません。

一体、どうしたのでしょうか。

そう思ったとき、彼に動きが。

右手に持っている杖を前に掲げて、何か呪文を唱えているのでしょうか？

今が好機のようですね。
私はキラーマシンに指示を与えた。
あの青年を攻撃しろ、と。
さて、どうされます？
ｓｉｄｅ　？？？　ＥＮＤ
何か、さっきまで動きのなかったキラーマシンが動き始めてるなぁ。
「アーンヴァル、すまん。あいつらの攻撃を電磁フィールドで防いでおいてくれ」
「ぜ、全部は無理ですよぉ（泣）」
だったら。
「―炎熱術式《ＰＳＹＣＨＯ－ＦＩＲＥ》、起動（ＬＯＡＤＥＤ）」
「圧縮（ＣＯＭＰＲＥＳＳＰＡＣＫＡＧＥＤ）、外郭作成、―変換《ＭＡＴＥＲＥＡＬＩＺＥ》」
呪文を唱えると、俺たちとキラーマシンの間に浮遊する物体が出現した。
「マスター、あれは？」
「いわゆる―浮遊機雷《ＦＬＯＡＴＩＮＧ－ＭＩＮＥ》、爆弾だ」

「ば、爆弾～？」

「じゃ、後は頼むぞ？」

「いや、こんな状況で頼まれましても～」

アーンヴァルが何か泣き言を言っているが、気にしない。

いざとなれば、守れるしな。

さて、と。次はアイツか。

「―重力制御《ＧＲＡＶＩＴＹ－ＣＯＮＴＲＯＬ》、拘束設定（ＭＯＤＥ－ＢＩＮＤＩＮＧ）、起動（ＡＣＴＩＶＡＴＥＤ）」

「圧縮、変換（ＣＯＭＰＲＥＳＳ－ＲＥＡＬＩＺＥ）」

呪文を唱えると、俺の目の前に黒い魔力球が出現する。

で、これを。

「発射（ＳＨＯＯＴ）」

あいつに向けて発射する。

ｓｉｄｅ　？？？

彼は、聞いた事のない呪文を紡いでいた。

まったく聞き覚えのないタイプの呪文だった。
唱え終わると、彼の前に魔力球が出現し、彼が杖を振るとそれは私のほうへ飛んできた。
「くっ。風よ、我を守れ」
呪文を唱えると、風の結界が私の周りに布かれる。
無駄ですよ。その程度の攻撃では。
ｓｉｄｅ　？？？　ＥＮＤ
あぁ、やっぱり止められたか。
そりゃ、防御呪文の１つや２つ持ってるよなぁ。
とりあえず、それは想定範囲内、だから。
「―重力制御《ＧＲＡＶＩＴＹ－ＣＯＮＴＲＯＬ》、―圧縮解除《ＤＩＳＣＯＭＰＲＥＳＳ》」
圧縮モードを解除し、その結界ごと拘束する。
黒い魔力が彼女の周り（というかおそらく結界）を包み込む。
包み込んだのを確認し、最後の呪文を唱える。
「拘束（ＢＩＮＤＩＮＧ）、下降（ＤＥＳＣＥＮＤ）」

呪文を唱えると、黒い魔力は中を締め付けながら地面に降りてくる。
さて、ご対面といきますか。

「くっ、何故私がこんなことに」
先ほどまで空中にいた少女がそう言っていた。
ちなみに、まだ拘束(BINDING)は解いてないよ。
「で、君は誰？」
「それは、私のセリフです。この国に、貴方のような人はいなかったはず」
勝気な人だねぇ。
「えっと、俺が質問してるんだが？」
そう言いながら拘束(BINDING)に魔力を込めていく。
「ぐっ。分かり、ました。言いますから、これを解いていただけません？」
「駄目。逃げそうだから」
「くっ」

そう言いつつ、彼女は俺のほうを睨み付けてくる。
だが、観念したのか話し始めた。
「私は、グリ。マジェコンヌに与するものよ」
「マジェコンヌ？」
「えぇ、私に何かあればマジェコンヌが黙っていないわよ」
マジェコンヌが黙ってないって。一体、どっちのだろう。
「えーとさ、確認。マジェコンヌって、犯罪神？それとも犯罪組織？」
「え？犯罪神？犯罪組織？何ですか、それ？」
「は？」
「だから、マジェコンヌって人が黙ってないっていってるんです！」
ちょっと待て。
「あのさ、マジェコンヌさんってどういう人？」
「え？電話とかメールとかでしか話したことないですけど」
ちょ、おま。ゲイムギョウ界でもゆとり化が進行してるのか？

何でそんな会ったこともない人を信用してるんだよ。

「今回のことは、その人に命令されてやったのか？」

「えぇ、そうです」

「何で！」

「一人で生きていくには、そうでもしないと生きていけないんです」

彼女から、色々なことを聞いた。

まず、身寄りだが今は誰もいないらしい。

数年前まではおじいさんとおばあさんと一緒に住んでいたが、今はもう二人とも亡くなってしまったこと。

それから一人でどうにか暮らしていたが、生活費が底をつき始めたため、職を求めてギルドに行ったが、女という理由のみで帰されたこと。

そんな時、ネット上でマジェコンヌと言う人が、能力のあるものを募集していることを知り、それに応募。

それで今に至る、というわけだ。

「少しだけ同情できるけど、あまり褒められたものじゃないな」

「はい、すみません」

先ほどまでの彼女はどこへやら。

完全に別人だった。

「まぁ、今はそれは置いといて、事態の収拾を優先で考えましょう」

俺はそう言うと、ブランさんを探した。

まぁ、簡単に見つかりましたけどね。

「ブランさーん、ちょっと来てもらっていいですか？」

「あ゛？今戦闘中だ！見てわかんねぇのか」

「いや、分かってるから言ってるんです。それだけの数全部相手にするつもりですか？」

まぁ、本編でロムちゃんラムちゃんは2人で相手にしてたけどね。

「…何か策があるのか？」

「えぇ、とりあえず」

「わかった。すぐ行くから待ってろ」

そう言うと、ブランさんは得物を振り回し出口を作り、こっちに来た。

「で、どうするんだ？」

「逃げます」

「「え？」」

ブランさんとグリさんは声を合わせてそういった。

まぁ、そりゃそうなるわなぁ。

「とりあえず、彼らを足止めします。お二人は先に出口に言ってください」

そう言うと、俺は先ほどの―浮遊機雷《ＦＬＯＡＴＩＮＧ－ＭＩＮＥ》を手元に戻した。

そしてそれを、２グループのキラーマシンへ向かって投げつけた。

それらが地面に落ちたとき、ドゴーンと音が鳴り響き、その後熱風が吹き荒れた。

「……マスター、あんな物を作ったんですか」

アーンヴァルの笑いがすごく乾いていた。

そして、俺はブランさん、グリさんと合流すべく出口へ向かった。

俺が出口に到着すると、二人は待っていてくれた。

「あの、すごい爆発が起こってましたが、あれは？」

「足止め用爆弾ですよ、ただの」

「マスター、足止め用爆弾はあんな火力ではないと思います」

グリさんは冷や汗をかきながら、爆発の起こっていた場所を見ていた。

「さて、それじゃここから出ましょうか」

そう言い、世界中の迷宮から出ることにした。

で、出た後。

「お二人とも、ちょっとだけ待ってください」

そう言って、俺は今出てきた出口のほうを向く。

「何をするの？」

そうブランが聞いてきた。

「この迷宮の時間を止めるんですよ。じゃないと、さっきのキラーマシンが出てきちゃうでしょ？」

「そんなこと、できるんですか？」

「できますよ？」

俺がそう言うと、「私、ケンカを売っちゃいけない人に売っちゃったのかなぁ」と涙目になっていた。

とりあえず、聞かなかったことにする。

「一時空間制御《ＣＲＯＮＵＳ－ＳＹＳＴＥＭ》、接続（ACCESS）」

「一時空間凍結《ＦＲＥＥＺＥ－ＭＯＤＥ》、構築（COMPILE）、実行（RUNNING）」

ふぅ、とりあえずこれでどうにかなるかな？

「さて、終わりました。とりあえず、これから後のことを話しにルウィーに行きましょうか」

そう言って、俺はルウィーへ歩き始めた

「そ、そうね」「は、はい」

ブランさんとグリさんはそう答えると、俺の後について歩き始めるのだった。

……ＳＡＶＥ

第１１話　事件の収拾（とりあえず）（後書き）

ケイス「ちょ。どういう状況だよ、これ」

どれが？

ケイス「全部だよ全部。敵キャラみたいに出てきたグリさんは実はいい人みたいだし、俺は思いっきり魔法使ってるし」

そうだねぇ。

まぁ、いいんじゃね？

ケイス「ついでに、魔法が何か普通の魔法と違うし」

うん、けど何やってるか大体分かるっしょ？

ケイス「わかるけどさぁ」

魔法は大体こんな使い方になるよ。

こうした方が、使い勝手が良いんで。

さて、それじゃ新しく出てきた人の紹介です。

グリ（ＧＲＩＳ）

銀髪のロングヘアで、服装が黒のゴスロリファッション。

魔法（主に４元素を使役した魔法）が得意な魔道師。

本編では述べられていなかったが、５年以上前の記憶がなく、覚ええているのは名前くらいだった。

数年前まで一緒に住んでいたおじいさんとおばあさんも、自分の親戚縁者などではない。
おじいさんとおばあさんは、亡くなった自分たちの孫娘に似ているグリを引き取って暮らしていた。
魔法については、気がついたら使えるようになっていた。（おじいさんやおばあさんが教えたわけではない）
そんな状況のため友達も知り合いも居らず、マジェコンヌ（？）にいいように扱われていた。

グリ「こんな私ですが、よろしくお願いします（ぺこり）」

ケイス「何回聞いても、腹が立つな、これは」

グリ「ひぃっ！？謝りますから許してください。本当にごめんなさい（土下座）」

ケイス「いや、君じゃない。この、マジェコンヌ（？）だ。だから、土下座はやめい」

ケイス、……お前何した？
このおびえ方は尋常じゃねーぞ。

ケイス「何もやってない！！」

（あとでグリのフラグ立てとくか）

ケイス「（ゾクッ）何だ、今の寒気は」

それでは次回、「キラーマシン、再度封印」でまたお会いしましょう

第１２話　キラーマシン、再度封印（前書き）

迷宮ごと時間を凍結させ、キラーマシンを一時封印したケイス。
彼には、キラーマシンを再度封印する手立てがあるのか？
さて、これからどうなることやら。

第12話　キラーマシン、再度封印

ルウィーに帰ってる途中なう。

さて、どうしようかなぁ。

キラーマシンを封印しないといけないのは当たり前として、どうするか。

まさか、このまま放っておくって手は…ないよなぁ。

「ねぇ、ブランさん」

「何？」

「ルウィーに、ゲイムキャラってどのくらい残ってる？」

「0（ゼロ）よ。まったく、何を考えてんだか」

そう言いながらグリさんのほうを睨む。

その睨まれたグリさんといえば…。

「ご、ごめんなさいっ！」

俺たちからちょっとはなれて後ろを歩いていた。

あ、今はもう拘束（BIND）をかけてないよ？

でも、とりあえず「逃げたらどうなるか、分かってるよね？」と言っておいた。

その後から目を合わせてくれなくなったんだが、何でだろ。

「マスター、それは当たり前と言うものです」

ちょ、アーンヴァル。心を読むな。

それはさておき、ホントどうしようかなぁ。

ゲームだと、どうだったんだっけ。

確か、ホワイトディスクが

『ネプテューヌに頼まれた』

って言ってたな。

だったら、話は簡単。プラネテューヌと交渉をすれば良い訳だ。

でも、そうするとあとは交渉の材料か。何かあるかなぁ。

「何を考えているの？」

ブランさんがそう聞いてきた。

「いや、ゲイムキャラをどう手に入れようかと画策中」

「何かいい案があるの？」

「いや、無いんだったら、他の国から貸してもらえば良いと思ってさ」

「宛は？」

「プラネテューヌ？」

「ばっ、お前、それは駄目だ。アタシはネプテューヌに頭を下げるのは絶対に嫌だからな！」

ブランさんは明らかな拒絶反応を示した。

まぁこの二人、水と油だしなぁ。

「ですよねー」

「だったらラステイションとかリーンボックスとかから借りれば」

「交渉の材料はどうします？リーンボックスはまだ良いとして、ラステイションは何か吹っかけてくるような気がしますが？」

「うっ……だったら、リーンボックスから」

「だから、交渉材料をどうするか、って言ってるんです。妹さん、一人貸し出しますか？あそこは女神様に妹がいないみたいですし」

「それもダメだ！何でロムかラムのどちらかを差し出さなきゃいけないんだ！？それだったら、今のままにすればいいじゃねーか！」

「いや、それはご勘弁くださいな」

「何でだよ！」

「今、こうしてる間も、俺の魔力がガンガン使われてるんですよ。このままじゃ干からびます」

もちろん嘘ですが。

閃光の杖を持ってる限り、このくらいどうにかなる。

「馬鹿野郎！何でそれを早く言わないんだよ」

「や、だってそういう風に心配しちゃうじゃないですか。だから嫌だったんですよ」

ｓｉｄｅ　グリ

うぅ、何かあの二人の会話がかなりヒートアップしてる。

それに、私が『ゲイムキャラ』を壊したことで、何か大変なことになってるみたい。

ここは、私が！

「あ、あのぉ、ちょっとだけいいですか？」

ｓｉｄｅ　グリ　ＥＮＤ

「あ、あのぉ、ちょっといいですか？」
グリさんが、そう話しかけてきた。
どうしたんだろう。
「どうしたんです、グリさん」
「ゲイムキャラさんって、蘇らせられないんですか？」
まぁ、普通はそう思うだろうなぁ。
「俺には無理ですね。グリさんは持ってるんですか？蘇生魔法」
「いえ、持ってない…です」
グリさんがそう言って落ち込んでしまう。
「大丈夫ですよ、何とかなりますって。…多分」
まぁ、でも正直俺たちだけじゃ決められない。
とりあえず、ミナさんを巻き込もう。
そう思い、俺たちはルウィーへ向かった。

さて、ルウィーの教会にて。

「えぇっ、モンスターってあの伝説に語られているキラーマシンだったんですか！？」

まぁ、そうだよね。

それが正しい反応だね。

「それで、この弱そうな人がその封印を解いちゃったの？」

こらこら、ラムちゃん。少しはオブラートに包みなさい。

「それでですね、ミナさん。ゲイムキャラってもうルウィーにはいないんですよね？」

「そうですね。世界中の迷宮にいたあの方が最後のゲイムキャラと聞いています」

うん、ブランさんの話と合うな。

「とすると、ゲイムキャラを他の国から借りる、または譲り受けるしかないと思うんですよ」

「そうですね。私も同じ意見です」

「ちなみに、ミナさんだったら、どこの国にはじめに交渉します？」

「そうですね……。私だったら、まずプラネテューヌでしょうか」

「やっぱりそうですよね」

まぁ、なんだかんだ言って一番交渉しやすいだろうしな。

他の2国に比べて、だけどな。

「お、お前ら……。アタシは絶対にネプテューヌに頭なんか下げないからな」

うんうん、分かってますって。

「でも、どう交渉しましょうか。正直言って、今のルウィーに交渉できる材料なんてないですよ？」

「なら、俺がどうにかして見せますよ。だから、プラネテューヌと通信してもらえません？」

最悪、俺が交渉材料になれば良い。

そうすれば、丸く収まるだろ。

そう思っていると、ミナさんとブランさんが一生懸命何かをセッティングしていた。

「それが通信用の機器ですか？」

液晶テレビにマイク、それにビデオカメラ。

小さいテレビ局だな、これは。

「そうよ、今まであまり使ったことがないけど。ほら、ロムにラム、あなたたちも手伝って。それとそこでいじけてる貴方もよ」

そうこうしているうちに、俺を除く４人でセッティングを完了していた。

「さて。それでは、まず私が話をするので、それに続いて話していただいてよろしいですか？」

「あぁ、わかった」

さて、一世一代の晴れ舞台、どうなることか。

ｓｉｄｅ　イストワール

はぁ、平和ですね、最近は。

ネプテューヌさんもネプギアさんも静かになったので、こうして静かに仕事ができます。

そう思っていると、他の国から通信が来たようです。珍しい。

さて、それでは早速この通信を受信しましょうか。

ふふっ。何か良いことがあると良いんですが。

ｓｉｄｅ　イストワール　ＥＮＤ

『はい、こちらプラネテューヌのイストワールです』

おぉ、いーすんさんだ。

相変わらずちっこいのう。

「お久しぶりです、イストワール様。何年振りでしょうか」

『あら、ミナさんではないですか。お久しぶりです。今日はどうしました？』

「実は、少々お願いがありまして。ちょっと変わりますね」

いーすんさんは『はい』と返事をして、こちらを見ていた。

ミナさんはというと、俺のほうを向いて、「それじゃ、後はお願いします」と小声でいい、席を空ける。

その空いた席に俺が座り、いーすんさんと対面する形となった。

「お久しぶりです、イストワールさん」

『ケイスさんじゃないですか。お久しぶりですね。元気そうで何よりです』

「はい、イストワールさんもお元気そうで」

『それで、お願いというのはケイスさんからなんですか？』

「ええ。実は…」

と言いかけたそのときだった。

『いーすーん、たっだいまー。あれ？何かお話中？…あーっ！！ケイスさんだー』

間がいいのか悪いのか。

ネプテューヌの登場だった。

「お久しぶり、ネプテューヌさん。お元気そうで何よりですよ」

『うんっ！私は元気だけが取り柄だからねー。で、今日はどうしたの？』

「いや、実はさ」

そのあと、かくかくしかじかで事の顛末を伝える。

『うーん、私としては別にかまわないんだけどね。けど、いーすんが何か見返りが欲しいって言ってるんだよね』

そう言ってる後ろから小さく『私はそんなこと言ってません！』と聞こえてくる。

『だからね、ネプギアに会ってあげてもらえないかなぁ』

「えぇ、そのくらいの見返りだったらいくらでも」

『わかった！ちょっとだけ待っててねー』

そう言うと、ネプテューヌは画面から出て行った。

変わりに、いーすんさんが画面に近寄って来て、こう言った。

『ネプギアさん、ケイスさんと別れてから、ずっと剣の練習をしているんですよ、あのときの剣で。だから、褒めてあげてくださいね』

うん、やっぱりネプギアはいい環境で育ってるんだなぁ、としみじみ思った。

そうしていると、『お姉ちゃん、私髪乱れてない？』とか『服、汚れてないよね』とか聞き覚えのある声が近づいてくる。

そして、その声がいったん途切れる。

そして、バンッと扉が開け放たれ、そこには懐かしい顔があった。

「よっ、ネプギア。久しぶりだな」

『はい、ケイスさん。こちらこそ、お久しぶりです』

「聞いたぞ、一生懸命剣の修行がんばってるって」

『もちろん。ケイスさんに一日でも早く近づくためですからっ！』

「がんばれよ？また会う日を楽しみにしてるからな」

『はいっ。それじゃ、私今からギルドに行ってきますから、これで』

「あぁ。またな、ネプギア。気をつけてな」

『ありがとうございます。ケイスさんも、体に気をつけてくださいね？』

そう言うと、ネプギアは画面から出て行ってしまった。

ｓｉｄｅ　ロム

今の女の子、誰なんだろう。

「あの、あの娘誰なんですか？」

さっき、ケイスさんが連れてきた女の人がミナちゃんにそう聞いていた。

「あれは、プラネテューヌの女神候補生のネプギアさんですよ。それと、その前の人が女神のネプテューヌさんですよ」

ネプギアちゃんって言うんだ。

……注意しないと。

私の中に、ネプギアちゃんは要注意人物として登録された。

ｓｉｄｅ　ロム　ＥＮＤ

ｓｉｄｅ　グリ

あー、女神候補生だったんだ、あの子。

それに強そうだし、何しろ『恋するオトメ』の顔をしていた。

それに伴って、何かさっきからロムちゃんが怖いんですけど……。

（；｜；）

ｓｉｄｅ　グリ　ＥＮＤ

『っていうことで、見返りももらっちゃったから、今からゲイムキャラを１人連れて行くよ。数時間だけ待ってて』

数時間後、女神化したネプテューヌが最高速度（すごいはやさ）で飛んできた。

ゲイムキャラを伴って。

「サンキュ、ネプテューヌさん」

「いいわよ、さっきも言ったじゃない。見返りはもらったって」

さて、それじゃ再度封印と行きますか。

「ネプテューヌさんも一緒に来ます？封印に」

「えぇ、もちろん。そんな強そうなモンスターと戦うことなんてめったにないことだし」

……やっぱりそっちか。

女神じゃなくて戦闘狂じゃないのか、本当は。

「足を引っ張らないでね、ネプテューヌ。アタシの邪魔するなら、マッハでぶちのめすわよ」

アンタもですか！

とりあえず、キラーマシンはこの2人の狂戦士（バーサーカー）に任せて、俺たちはそのキラーマシンの封印を行ったのだった。

「戦い足りないー」

「…右に同じ」

「やかましいわっ！」

「ゲイムキャラさん、本当に申し訳ありません。このようなことを今回お願いしてしまって」

「いいのですよ、ルウィーの教祖。わたしたちの力は、このような時のためにあるのですから」

あのバーサーカー達がいなければ、もっといい場面だったのに。

そう思いながら、俺達はルウィーの教会へ帰っていった。

……ＳＡＶＥ

第12話　キラーマシン、再度封印（後書き）

祝！ファルコムさん、ケイブさん配信記念！

ケイス「いや、意味が分からないから」

本当はファルコムさん配信までにこの本編にファルコムさんを出したかったんだけどなぁ。

ケイス「まぁ、でも出しちゃいけないってわけでもなし」

モチロンですよ！

さて、今回ですが。

ケイス「無理やりだったなぁ、本当。いつも以上に」

うるせぃ。

ケイス「でも、久々にネプギアに会えたから、ほっこりできたよ」

そうだねぇ、何話ぶりだろうか。ちなみに、プラネテューヌから旅立って1ヶ月くらいって設定でよろしく。

ケイス「ただ、ロムちゃんがずっと不機嫌だったんだけど。何かあったのか？」

…知らないほうが身のためだと思うよ。

ケイス「ま、どうにかキラーマシンを封印できたからいいか」

お前もお気楽だのぅ。

ケイス「それで、次はどうなるんだ？」

まぁ、やることやりましたから、次回でルウィー編は最後。あ、もちろん本編開始前って意味でね。

ケイス「ってことは、また旅立ちか。結局、ラムちゃんとは仲良くなれなかったなぁ」

なりたかったのか？

ケイス「ま、嫌われてるよりかはいいだろ？」

……（三角関係がお望み、と。あ、四角関係か？ネプギアも入れると）

ということで。

それでは次回、「旅発つ者と残る者」でまたお会いしましょう

第１３話　旅発つ者と残る者（前書き）

ネプテューヌの協力により、キラーマシンを再度封印することができた。
そして、ケイスは平和になったルウィーを見て回ることにした。
さて、これからどうなることやら。

第１３話　旅発つ者と残る者

「それじゃ、私はこれで帰るわね」

ネプテューヌはそう言って、ルウィーの教会を後にしようとしていた。

「ネプテューヌ、サンキュな」

「別に、いいのよ。私はルウィーに貸しが作れただけでも満足しているんだから」

そう言いながら、クスリと笑う。

「やっぱりそういうこと、か。だから、私は反対したのに」

ブランさんは呆れたような、諦めたような微妙なかおでそんなことを言っていた。

「冗談よ、ブラン。このくらい言わせて欲しいわね」

まったく、この二人ときたら、仲がいいんだか悪いんだか。

「さぁ、早く帰ったら？妹さんが心配してるわよ？」

そう言いながら、ブランさんはニヤッと笑う。

まるで、さっきのお返しだと言わんばかりに。

「そうね、ブランにも早く帰れって言われてしまったし」

ネプテューヌは心なしかシュンとした感じでそう言った。

「いや、あの、誰も本気で帰れなんて、そんな…」

ブランさんはあたふたしながら何か言おうとしているが。

傍から見てると…。

「冗談よ」

…遊ばれてるようにしか見えないのは何でだろう。

「てめっ、ネプテューヌ！早く帰りやがれ、このバカが」

「あははっ、やっとブランらしくなった。それじゃ本当に、じゃぁね」

ネプテューヌはそう言うと、協会から出て行った。

そして、教会の中は沈黙に包まれた。

「あははっ、お姉ちゃんとプラネテューヌの女神の掛け合い、面白かったね、ロムちゃん」

「…そうだね、ラムちゃん」

…かのように見えた。

さて、俺もそろそろ次の国に行く時期かな。
キラーマシンの封印もできたし、あとは時間がどうにかしてくれるだろう。
「さて、それじゃそろそろ俺も行こうかね」
「…ケイスさん、どこに行くの？近くのお店だったら、私も一緒に行きたい…」
「ロムちゃんが行くならわたしも。何か買ってくれるんでしょ？ケイス」
ロムちゃんとラムちゃんは、俺がどこかに買い物に行くものだと思ってるみたいだ。
「違うよ、ロムちゃん、ラムちゃん。俺もそろそろ、また旅に戻ろうかな、って思ってさ」
そう言うと、ラムちゃんは「なーんだ、つまんない」と言って、ミナさんのほうに行ってしまった。
一方ロムちゃんは、「えっ？」と言って俺の顔をずっと見ていた。
「ケイスさん、…あのネプギアちゃんって女の子の所に行くの？」
何故そこでネプギアが出てくる。
「違うよ、ロムちゃん。俺は、ラステイションに行こうと思ってるんだ」

「ラステイション？…何をしに行くの？」

「別に、何をしに行くってわけじゃないんだ。俺は冒険者だからね。いろんなものを見たいだけなのかもしれないけど」

「…だったら、ケイスさんのお別れ会…したい。いい？…ミナちゃん」

そう言ってミナさんのほうを見た。

ミナさんは困った顔で「いいですよ、ロムちゃん」と答えた。

「…うん、それじゃ準備…する。お姉ちゃん、ラムちゃん、ミナちゃん、…手伝って」

「しょうがないなぁ。ロムちゃんの頼みじゃ断れないからね」

「うん、しょうがない。私もロムの頼み聞いてあげたいから」

「だったら、善は急げ、ですね」

そして、４人は俺のお別れ会の準備をするために、教会から出て行った。

いや、正確には、

「ケイスさん、グリさん。お二人はどこかで時間をつぶしていていただけますか？夕方くらいに教会に戻ってきていただければ良いですから」

ミナさんはそう言ってから出て行った。
俺、ＯＫしてないのに。くすん。

「さて、どうしましょうか」
おれはグリさんにそう話しかけた。
するとグリさんは、「ちょうどいいです」と言って、俺の手を引いて喫茶店に入っていった。
何でも、相談があるらしい。

「で、何の相談ですか？」
俺は注文してから１０分ほど待たされて出てきた珈琲を啜りながらそう聞いた。
お、これ美味ぇ。

「あの、私も連れて行ってもらえませんか？」

「え？どうしてまた」

「私は、前にお話したとおり、身寄りがもうないんです。だから、連れて行ってもらえないかなぁ、って」

あ、そういえばそうでしたねぇ。
すっかり忘れてました。

「ダメです」
俺は即答した。
「何でですか！」
「グリさん、貴女にはやらなくてはいけないことがあるはずです」
「やらなくてはならないこと、ですか？」
俺は「ええ」と答えながらまた珈琲を啜る。
「今回、ルウィーをこんな状況に陥れたのはどこのどなたですか？」
グリさんは「うっ」とうめき声をあげた。
結構、気にしていたようだ。
「貴女には、この状況を見守る義務があると思います」
「確かに、そうですね」
「それと、もうひとつやって欲しいことがあります」
「何でしょう」
「女神候補生…ロムちゃん、ラムちゃんに魔法を教えてあげてもらいたいんです」
「魔法を、ですか？」

グリさんは「女神様には、不要だと思いますが」と続けた。
まぁ、普通はそう思うよな。
「いざと言うときの保険ですよ。現在の女神様たちは魔法がほとんど使えないと見て間違いないようですから。それに」
「それに？」
「あの2人は、本から得た知識で魔法を行使しています。そんなものより、生の情報（まほう）のほうが断然いいと思いませんか？」
「確かにその通りだと思います。でも、私に教えられるでしょうか？」
「大丈夫ですよ、グリさんは優しいですから」
「はい、ケイスさんがそう言うなら、私やってみます！」
そう答えたグリさんの顔は笑顔だった。

まじめな話が終わった後、俺とグリさんは他愛のない話をしていた。
俺からは、プラネテューヌで経験した話やプラネテューヌからルウィーへ旅したときの話、あとはロムちゃんラムちゃんに初めて会った時の話。
グリさんからは、おじいさんやおばあさんが生きていた頃の話やその後俺達に合うまでの話を聞かせてもらった。

俺が一番驚いたのは、グリさんがメドローアを使えることだった。
アレ、使える人いたんだ。
話しているうちに夕方になってしまったので、教会に戻ることにした。
教会に戻ると、すでにパーティーが始められる状態となっており、俺達はすぐにパーティーを開始した。
ブランさんの開会の挨拶から始まって、今は雑談中…のはずなんだが。
誰だ。酒を入れたのは。
「いつもニコニコあなたの隣に這いよる混沌、ニャルラトホテプでっす！」
「ブラン様。何言っちゃってるんですか！」
「なぁ、ラステイションのユニを連れてきた方がいいか？」
「……それは、いろんな意味でダメです」
「世の中の、ニートではない人間のほとんどは、人間の資質がスカラーではなくベクトルであるということを理解できないのだね」
「ロムちゃんが…、ロムちゃんが饒舌にしゃべってる！しかも難しいことを」

「何か、いい具合に混沌(カオス)だな」

「……お→ー←……」

「今度は壊れたっ！？Σ（「□」）」

色々としっちゃかめっちゃかだったが、パーティーが終わった。

まぁ、ブランさんもロムちゃんも何も覚えていないと言うのが幸いか。

「あ、みんな、ちょっとだけいいかな？」

俺はそう言い、みんなの顔を見渡した。

「俺さ、今までこんなことやってもらったことなかったんだ。本当にありがとな」

そう言って、頭を下げた。

この世界に来る前から、いろんな出会いや別れをしてきたけど、こんなに別れが惜しくなるのは初めてだった。

「そうよ、感謝しなさいよ。女神様じきじきにやってあげたんだから」

ラムちゃんがそう言うと、ミナさんが後ろからコツンと頭を叩いた。

ラムちゃんは「いたーい」と言いながらその場で頭を押さえた。

そんなラムちゃんに目線を合わせるように俺は立てひざで座り、頭を撫でながら「ありがとね、ラムちゃん」と言った。

そんな俺達を「……むー」と言いながらロムちゃんが見ていることに俺は気づかなかった。

ラムちゃんは、はじめは気持ちよさそうにしていたのだが、ッミナさんやブランさんがニコニコしながら見ているのに気づくと「はっ」となり俺の手を払いのけた。

「なれなれしくしないでよっ」

そう言うと、教会から出て行ってしまった。

…いい空気だったのになぁ。

パーティーが終わったあと、ブランさんとロムちゃん、ラムちゃんは自分の部屋に帰っていき、教会には俺とグリさんとミナさんが残された。

「そうだ、ミナさん。ちょっとまじめなお話が」

「どうしたんです？」

「グリさんの話です。実は……」

と言って、昼間にグリさんと2人で話していたことを話してみた。

「そうですね。正直言わせてもらうと、教会にはそれほど欲しいとは思いません」

「そうですか……」

「ですが、必要だとは思います。ですから……ルウィーでギルドメンバーになる気はありませんか？」

「私、一度断られているんですよ？」

「それに関しては大丈夫です。ギルドには私のほうから、推薦状を出します。そして、ギルドのお仕事の合間にでもロムちゃんとラムちゃんに、魔法を教えに来ていただければ。それではダメですか？」

「いえ、私には充分すぎるほどです。その依頼、お受けします」

「お礼を言うのはこちらのほうですよ」

そう言って、ミナさんは右手をグリさんのほうに差し出した。

「これからよろしくお願いしますね、グリさん」

「こちらこそ、よろしくお願いします。ミナさん」

「さて、それではもう遅いですから、お二人とももう寝たほうがいいと思いますよ。お二人とも、昨日のお部屋を使えるようにしてあるので、そこを使ってください。」

そういわれたため、俺達は昨日使わせてもらった部屋へ向かった。

そして、俺の部屋の前に来たとき、２人の人影が見えた。
「あらあら、ケイスさんモテモテですね」
部屋の前にいたのはロムちゃんとラムちゃんだった。
「それじゃ、私も自分の部屋に行きますね。おやすみなさい」
そう言って、早足で自分の部屋に向かっていった。
さて、俺にどうしろと。
「……ケイスさん、一緒に寝ていい？」
「わたしはロムちゃんがあんたと一緒に寝たいって言ってたから一緒に着ただけなんだからね！カン違いしないでよ」
ロムちゃんの上目遣い＋ウルウルに勝てるわけもなく、陥落しましたよ、ええ。
結果的に、「小」の字になって寝ました。
そして二人ともが俺に抱きついてきて、「あったかい……」と言う始末。
二人とも子供と言うこともあり、すぐに寝てくれた。
ただ、二人ともが寝言で「行っちゃやだ」と言って俺の服を握ってきたのは印象的だった。
思わず、二人の頭を撫でてしまうほどに。
その後「えへへっ」と笑ってくれた時は、思わず「ズキン」と心が痛んだ。。

朝。
俺はロムちゃんとラムちゃんを起こし、下へ向かう。
そこでは、ミナさんが朝食の用意をしていた。

「ミナさん、おはようございます」

「おはようございます、ケイスさん。それにロムちゃんもラムちゃんも」

「おはよー、ミナちゃん」
「ミナちゃん、……おはよ」

「さぁ、冷めちゃいますから早く召し上がれ」

ルウィー最後の食事、ともなると感慨深いものになるなぁ。

「それと、ケイスさん。グリさんから伝言です。今度ルウィーに来たときに、また戦闘（おはなし）しましょう、だそうですよ」

「そうですか。じゃぁ、こう返しておいてください。望むところです、と」

ミナさんは「お二人とも不器用ですねー」と言って笑う。
どういう意味だ？

そして、朝食をお食べ終わり、俺は自分の荷物をまとめていた。
そしてこの数日間世話になった部屋に挨拶をして教会に向かう。
教会では、ミナさんとブランさん、ロムちゃん、ラムちゃんが待っ

ていた。

「ありがとう、ケイス。また会いましょう」

「ケイスさん、本当にお世話になり、ありがとうございました。近くに着たら、また寄ってくださいね」

「ケイス、アンタが強いってのは認めてあげる。けど、わたしはもっと強くなって見せるんだから。そうしたら、アンタのこともわたしが守ってあげるわよ」

「ケイスさん、……ばいばい（ウルウル）」

「うん。みんな、ありがとう。この濃厚だった数日、絶対に忘れないから。それじゃ、またな！」

そして、俺は教会から出て一歩、また一歩と足を進め始めた。

さて、次の目的地は、ラステイションだ！

……ＳＡＶＥ

第１３話　旅発つ者と残る者（後書き）

やっちまったぜ。

ケイス「中の人ネタのことか？」

うん、そう。

ケイス「でも、これって分からない人が見たら意味不明だよな」

まぁ、そうだな。
その場合は、その部分だけ消す？
消しても問題ないようにはしてあるし。

ケイス「まぁ、誹謗中傷があったらね。今のところなさそうだから安心してるけど」

ということで、ルウィー編終了です。

ケイス「ってことは、次回からラステイションか？」

まぁ、ラステイションって言えばラステイションだな。
けど、まだノワールやユニは出ない。

ケイス「どういう意味だそりゃ」

ということで。
それでは次回、「空から何かが落ちてきた」でまたお会いしましょう

ケイス「おい、何が落ちて来るんだよ！」

幕間　設定のまとめ～ルウィー編～（前書き）

ルウィー編が終了したので、ここまでの設定のまとめをしておきます。

幕間　設定のまとめ～ルウィー編～

オリジナルキャラ

ケイス

現実世界から転生したこの小説の主人公。

基本的に感性のままに行動する。

現在、剣士、銃士、魔道師の力を駆使して戦闘を行う。

剣士としての力

片手剣、両手剣どちらも自在に扱える。

また、棒術についてもそれなりに使えるらしい

銃士としての力

軽火器から重火器まで扱うことができる。

ただし、重火器の場合移動に支障が出るためあまり多用していない。

これまでの傾向より、まず軽火器で牽制してから突っ込むという戦法を多用する。

魔道師としての力

アイテム創造から空間掌握、時間停止など、多岐にわたる。

ただし無詠唱で使用できるものは限られており、それの筆頭が魔力壁（ALL LONG_W）である。

使用する呪文は、コンピュータのプログラムに近い。

また、魔術師の力を行使する際に便利な閃光の杖だが、彼自身が剣士として戦うことも多いため、左手首にブレスレットとして身に付けるという方法をとっている。

アーンヴァル
ケイスの中にある剣士の力によって生み出された存在。
彼女自身、自分が何者なのかは理解している。
彼女の中に武装神姫としての知識もあり、装備の解析については問題ない。
また、ケイスの持つ転移の数珠の力を使用することにより、異空間からの武装の取り出しを行うことができる。
だが、基本的に彼女は自分ではその武装を使用することができないため、自分から行動を起こすことは少ない。

グリ
ケイスたちがルウィーで出会った少女。
まぁ、少女とはいえ外見年齢は１６～２０歳程度なのだが。
某魔法少女も１１８歳時の物語も「少女」で通していたため…（以下、脱線のため削除）

現在はルウィーにて贖罪行動中。
主に、ゲイムキャラの保護、ルウィーの女神候補生姉妹に魔法を教えると言ったことを行っている。
後者については、対象である姉妹が気侭なため、あまり進まないようだ。

彼女の魔法は基本的に４大元素を扱う魔法が多い。
火、雷、風、水、氷、土
（雷は風に、氷は水に含まれる）

特殊記述として、彼女には６年以上前の記憶が存在しない。

本人もすでに気にはしていないため、「別に思い出さなくてもいいか～」程度の認識。

ケイスの使用する武器

近接戦専用

Ｍ４ライトセイバー
Ｍ８ライトセイバー
剣の部分がエネルギーで構成されている小剣。
Ｍ４、Ｍ８はエネルギーの消費量の差を示している。

Ｍ４ダブルライトセイバー
Ｍ４ライトセイバーを２つ上下に取り付けたダブルブレード。
多数の敵がいる場所に切り込むのに重宝するが、今のところ使用された実績なし。

ギュリーノス
刃の部分がエネルギーで構成されている大剣。
使用実績なし。

レーヴァテイン
剣の部分が炎を模した何かで構成されている小剣。
鉄などの金属であれば、溶かし斬ることが可能。
持っていても、別段熱くない。

近・中距離

アルヴォＰＤＷ１１

普通のハンドガン。通常モードでは通常弾（火薬弾丸）で攻撃するが、エネルギーモードの場合はエネルギー弾を使用する。
エネルギーモードの使用実績はないが、それなりに使いやすいハンドガン

アルファピストル
ピストルと名がついている通り、あまり大きくない。
ケイスはこれを魔力弾を使用するための銃に魔改造済。
そのうち本編に出てくるかも

遠距離

ＬＣ５レーザーライフル
今のところ、野良ドラゴン掃討のために１回だけ使用された武装。
基本的にケイスが近距離専門なため、あまり出番がない。
かつ、エネルギーチャージに時間がかかるため、というのも理由のようだ

幕間　設定のまとめ～ルウィー編～（後書き）

とりあえず、ルウィー編が終わりのため、まとめてみましたが…あまり変わっていませんねぇ。

ケイス「変わったのはグリさんくらいか」

そうだね。でも、彼女も一応重要な役をしてもらう予定。

あと、ちなみに地味に閃光の杖をフォームチェンジさせてある。こっちのほうが書きやすいかな、と思って。

ケイス「そうだな。いちいち出して呪文を唱えて～ってのはアレだしな」

えぇ、アレです。

と言うことで、今回は短いですがここまで。

第１４話　空から少女が落ちてきた（前書き）

※予告と題名を変えました
ルウィーから旅立ったケイス。
彼らはルウィーとラステイションの国境に差し掛かっていた。
さて、これからどうなることやら。

第１４話　空から少女が落ちてきた

俺ことケイスは、今ルウィーからラステイションに至る街道を歩いている。

すでに、ルウィーを出発してから４日が経過した。

目にする景色も、一面の雪から緑に変わりつつあった。

そろそろ、ラステイションの土地が近いようだ。

「アーンヴァル、そろそろラステイションに入るみたいだ」

「あ、やっとですか。ラステイションに入ったら、私の武装を作ってくれるんですよね？」

「ま、作れるやつがいたらな」

そう言っておれは歩を進めた。

…そんな時だった。

「マスター、上から何か来ます！」

上から？

上から何が来るんだ？

「マスター、どうやら人間が落ちてきているようです」

人間！？

「アーンヴァル、その人間の落下予測位置を教えてくれ」

「はい、南に１０メートルほど先がそのポイントとなります」

「予測到達時間は？」

「はい、あと３０秒ほどです」

ちいっ、そんなに時間がないか。

そう思い、俺は魔法の準備をする。

「重力制御（GRAVITY CONTROL）、補助設定（ASSIST MODE）、起動（LOADED）」

「浮遊補助（FLOAT ASSISTRAPIDREALIZE）、高速変換」

そこまで唱えて、その落ちてくる人を目視確認する。

…見えたっ！

「実行！（RUNNING）」

そう言って俺は力を解き放つ。

次の瞬間、落ちてきた人の落下速度は遅くなったため、俺は両腕で

受け止めることができた。

「ふぅ、危機一髪だったな」

まったく、俺がここにいなかったらどうなってたんだよ。

そう思いながらその落ちてきた人の顔を見たのだが…俺は固まってしまった。

「ま、まさか、ファルコムさん？」

ファルコム。

ゲイムギョウ界をドラゴンスレイヤー1振りで冒険している冒険者…のはず。

それが何で、空から落ちてきたんだ？

そんなことを考えていたら、ファルコムさんが「うぅ…ん」といって目を覚ました

「あ、気がつきました？」

「あぁ、うん。って私は気を失っていたの？」

「まぁ、そうですね。さすがに空から人が落ちてくるとは思っていませんでしたが」

「空から？……あ」

ファルコムさんは、何か思い当たる節があったようだった。

「危なかったですよ、もう少しで地面に激突でしたから」

「あははは、私はいろんなものに守られてるみたいだからね。そんな簡単には死なないのさ」

突っ込んでいいのかなぁ。「そういう人は、空から落ちてきません」って。

「ありがとう、私はファルコム。見ての通り、しがない冒険家さ」

「俺はケイスと言います。貴女と同じように冒険者をやっています」

「へぇ、冒険者か。私と同じような人がいてくれて、うれしいよ」

「俺も同じですよ、ファルコムさん」

まぁ、冒険者（正確には片方は冒険家だが）同士だから、打ち解けるのも早かった。

「そういえば、何で空から落ちてきたんですか？」

「実は、このはるか上空に、イクスという島が浮かんでいるんだ」

俺は、咄嗟のことに「え？」としか答えられなかった。

そんなことを言っているのがファルコムさんじゃなかったら、信じ

ていないだろう。

少しだけ沈黙が流れた後、俺は会話を再開した。

「それで、そのイクスって島はどんなところだったんですか？」

「信じてくれるのかい？」

「えぇ、もちろん。俺だって行ってみたいですしね、そのイクスという島に」

「君は面白い人だね。こんな与太話を信じるなんて」

「与太話なんですか？」「まさか！」

ファルコムさんによると、地上ではその島はイクスと呼ばれているとのこと。行ったことがある人がいないため、「X（イクス）」と名付けられたらしい。

そして、ファルコムさんはある塔に登り、最上階にたどり着いたときに光に包まれ、気がついたらその「イクス」にいた、と言うことだった。

そしてその「イクス」に住む人たちに、その島の本当の名前は「アージェン」だと言うことを教えてもらった、と。

そして、その島を冒険中にモンスターに襲われ、島から落とされ、地上に落ちてしまったと言うことだった。

「まぁ、信じるも信じないも君次第だけど」

俺の頭に、ひとつの事柄が浮かんだ。
それは……ネタ元はイース、ということ。
「そうですね。信じますよ、俺は」
「本当に？」
「えぇ。だって、そっちのほうが面白いじゃないですか！」
そう言って、サムズアップした。
「うん、違いない」

「それじゃ、今度は俺が今回の冒険で経験したことを話してもいいですか？」
「ああ、他の人の話ってあまり聞かないからなぁ」
そう言って、耳を傾けてくれた。
そして俺は、プラネテューヌで女神のネプテューヌと共闘したこと、ルウィーで古の戦闘機械（いにしえ）、キラーマシンと戦ったことを話した。
「そんなに強かったのかい？そのキラーマシンってのは」
「強い、なんてモンじゃないですよ。そんなのが数十体ですよ」

「あははっ。それは災難だったねぇ」
俺は「笑い事じゃないですよ！」と言い、話を続けた。
「まぁ、どうにか封印できたからよかったですよ」
「ふぅん。君も、面白い経験をしてるんだねぇ」
「まぁ、ファルコムさんほどじゃないですけどね」
「ちなみにさ、今の話って本にしても大丈夫かな？あ、私実は本を書いててさ」
「そうなんですか？」
俺はそう答える。
もちろん知ってるさ。
クリスティン漂流記はブランさんに読ませてもらったからな。
「うん、それで、今聞いた話を書かせてもらえないかなぁって」
「いいですよ、別に」
ファルコムさんは「ホント？」とうれしそうに言っていた。
でも、俺の冒険が小説でかかれるなんて、何かむず痒いな。
そんなこんなで色々な話をしたあと。

「さて、それじゃ、名残惜しいけどここでお別れかな」
ファルコムさんはそう言って、荷物をまとめ始めた。
と言うか、バッグに入っていたものを元に戻しただけだけどな。
「ファルコムさん、どこかに行く予定が？」
「うーん、もう一度あの島に行きたいけど、塔に登りたくないからなぁ」
……ダームの塔？
「俺は、ラステイションに向かっている途中なんですよ。よかったら、一緒に行きませんか？」
そんな俺の誘いにファルコムさんは「いや、私はいいよ」と答えた。
結構期待してたんだけどな。
「私は、一度実家に帰るよ。いいタイミングだし」
「実家って、どこなんですか？」
「プラネテューヌだよ」
「へぇ、そうなんですか。俺も今の旅が終わったら、またプラネテューヌに行く予定なんで、もしかしたら会えるかもしれませんね」
「そうだね。そのときのために、また新しい冒険をしないと」

俺は、「それじゃ、会えないじゃないですか！」と言ってツッコんだ。

その後、二人して「あははっ」と笑った。

二人で笑いあった後、ファルコムさんが「そういえば…」と言って鞄をまさぐりだした。

そして、何かを見つけると、それを俺のほうに差し出してきた。

「これさ、イクスの洞窟の中で見つけたんだ。何に使うものかは分からないんだけど、あげるよ」

そう言って、俺にそれを渡してきた。

それを受け取ったとき、アーンヴァルが胸ポケットから出てきて「マスター。これ、ラファールですよ」と言った。

…お前、今まで出てきてないのに、何やってんだよ。

ん？ラファール？

「…ラファールだって！？」

「気に入ってくれたみたいだね」

「え、えぇ」

ファルコムさんはアーンヴァルを指差し、「ちなみに、そちらは？」と聞いてきた。

「コイツは、アーンヴァルっていいます。サポートをしてもらっている俺の仲間です」

ファルコムさんは「へぇ…」と言って、アーンヴァルを見ていた。
一方のアーンヴァルは、居心地が悪そうにその視線に耐えていた。

「うん、君の仲間のことだからとやかくは言わないよ」

「さて、それじゃお別れだ」

「はい、ファルコムさん、お元気で」

「そっちもね。機会があったら、また会おう」

そう言って、俺達は別れた。

ｓｉｄｅ　ファルコム

ふむ、面白い人もいたもんだ。

色々な経験をしていることもそうだけど、ああいったものを仲間として連れているとはね。

それに、また会いそうな予感がするから、そのときまでに私もまた面白い話ができるよう、冒険をしておこう。

そう思い、家路を急いだ。

side　ファルコム　END

……SAVE

第１４話　空から少女が落ちてきた（後書き）

とりあえず、はじめに今回出てきたアイテムの説明をしておきます。
ラファール
武装神姫のアーンヴァルの武装をすべて合体させた飛行形態のマシン、と言えば分かりますかね？
ちなみに大きさは、アーンヴァルの大きさと同じため１５～２０ｃｍ位です。
（あくまで、アーンヴァル用の武装ですので）

さて、と言うことでファルコムさん登場です。

ケイス「まだ、仲間にはならないんだ」

うん、でも再会のフラグは立てておいたよ？

ケイス「だけど、俺がアーンヴァルを持っているのを見て、どう思ったんだろうなぁ」

反応を見る限り、『この変態！』とかではなさそうだけど。

ケイス「もしそれだったら、死んでも死に切れん」

と言うことで、次回はやっとラスティションです。

ケイス「ノワールとユニにやっと会える。ここまで長かった…」

そういえば君、この黒の姉妹大好きだったね。

ケイス「黒の姉妹言うな」

ということで。

それでは次回、「黒の女神」でまたお会いしましょう

ケイス「ちなみに、ラステイションでは中の人ネタ禁止だからな」

えー。

第１５話　黒の女神（前書き）

空から落ちてきた少女、ファルコムと別れラステイションを目指すケイスとアーンヴァル。
彼らはラステイションを目指し旅を続けていた。
さて、これからどうなることやら。

第１５話　黒の女神

うーむ、わからん。

この間ファルコムさんからもらったラファールなんだが、何故か動作しない。

アーンヴァルに言わせると、「ちゃんと反応は返ってくるんですけどね」とのこと。

反応は返ってくるのに、動いてくれない。

ファルコムさんにこのラファールをもらった当初は、アーンヴァルが「これで私も戦闘に参加できます！」といってはしゃいでいたのに。

何で動かないんだろうなぁ。

「なぁ、アーンヴァル」

「…なんですか、マスター」

「そう落ち込むな。そのうち、ちゃんと動くようになるさ」

「…私は落ち込んでなんていません。では、いつ動いてくれるんでしょうか、ラファール（これ）は」

あぁ。もう取り付く島もない。

何でこうなっちまったんだろう。

ｓｉｄｅ　アーンヴァル

マスター、本当に申し訳ありません。

私はこんなことが言いたいわけではないのに。

何故か、口を開けばマスターを貶すかのような言葉が出てきてしまう。

私は一体、どうしてしまったのでしょうか。

あ…れ？段々と…から…だ、が、うご……

ｓｉｄｅ　アーンヴァル　ＥＮＤ

さっきから、アーンヴァルの様子がおかしい。

今まで、あんなことを言ったことなんてないのに。

まさか、精神的ストレス？

…まぁ、普通に考えてそんなことあるわけがない…とも言い切れないなぁ。

「おーい、アーンヴァル。機嫌直して出て来いよ」

俺がそう言っても彼女は無反応。

ま、そのうちひょっこり顔を出すだろ。

ｓｉｄｅ　アーンヴァル

気がつくと、私は真っ暗な空間にいた。

『ようこそいらっしゃいました、機械人形（マシンドール）』

「誰！？」

聞いたことのない声。

だけど、すごい懐かしい気がする。

『懐かしい、ですか？私達は初めて会うのですけど』

「え！？何で私が考えていることが分かるの！？」

『私はこの空間そのもの。ですから、手に取るように分かりますよ、あなたが感じている恐怖感も、何もかも』

空間そのもの？意味不明。

私は、思考を巡らすのもバカバカしくなり、少しだけ冷静になってみる。

「…で、あなたは誰なの？」

『あら、瞬時に冷静になってしまわれた。やはり面白みがないです

ね、あなた方機械人形（マシンドール）は』

「誰なのか、…と聞いてるのですけど？」

私は少しだけ怒気を含めて言ってみる。

『あら、怖い。私は…』

声の主はそこまで言うと、急に声を発さなくなった。

その代わり、私の目の前にある意味見慣れたモノが姿を現した。

それは、あのラファールだった。

『お分かりですか？』

「何で、貴女が意思を持っているの？」

『そのようなことを、私に聞かれましても。判るわけがないじゃないですか』

彼女（といっていいかは定かではないが）は、そう飄々と答えた。

まぁ、もちろん聞けるとは思っていない。

「それで、私にどうしろと言いたいの？貴女が私に成り代わるの？」

『それはそれで魅力的な提案ですが、違います』

「だったら、何？」

『貴女に、わたしの力を受け取っていただきます』

ｓｉｄｅ　アーンヴァル　ＥＮＤ

さて、そろそろラステイションか。

ノワちゃんとかユニちゃんを生で見られるんだ。

うん、この世界に来てよかった。

…とその前に。

「アーンヴァル、ラステイションに着いたぞー」

俺は、アーンヴァルにそう呼びかけてみる。

…無反応。

なぜ？

不思議に思い、胸のポケットに手を突っ込んで、アーンヴァルを出そうとしてみる。

あら？また無反応？

いつもだったら、「いきなり手を突っ込むなんて、何てデリカシーのない…」とか言って怒るはずなのに。

そして、出してみたのだが…。

「スリープモード？」

目が単色の状態となっており、焦点が合っていない状態だった。

いままで、こんなことになっていることはなかったのだが…。

ｓｉｄｅ　アーンヴァル

「あなたの、力？」

『はい、私の力です』

「拒否権は？」

『すいません。もう形振り構っていられないんです』

そう言って、ラファールが私の方へ向かってきた。

私にぶつかる寸前、彼女は

「二度とあんな悲劇が繰り返さないよう、力を貸してください」と

だけ言った。

そして彼女が私の中に入り始めた瞬間、理解した。

彼女の力、そして、私のこれからの戦い方。

『本当に、無理矢理で申し訳ありません』と彼女は詫びた。

そして、『私はすぐに消えますから』とも言っていた。

「何で、私なんですか？」

『貴女が、一番波長が私に近かったから』

「私が悪用するとかは、考えなかったんですか？」

『機械人形（マシンドール）にそんな器用な真似はできないと考えました』

「どういうことですか？」

『貴女のマスターは、そんなことができる方ではないでしょう？』

ま、そうですね。

私のマスターに限って、この力を悪用するとかは考え付かないでしょうしね。

「信用、してくれているんですね」

『違います』

「え、それじゃ何で？」

『信用ではなく、信頼です』

その言葉を最後に、彼女は言葉を発さなくなった。

おそらく、先ほど言ったとおり、消えてしまったのだろう。

そして、辺りが眩い光に覆われ始めた。

目覚めの時間、ですね。色々な意味で。

私は、その光に身を委ねた。

ｓｉｄｅ　アーンヴァル　ＥＮＤ

「おい、アーンヴァル。どうしたんだよ」

「……」

「返事しろよ。おい、どうしちまったんだよ！」

アーンヴァルに声をかけても反応がない。
それに、一緒に入れておいたラファールもなくなっていた。
もしかして、あのラファールって呪(カース)いのアイテムだったんじゃないだろうなぁ。
もしそうだったら恨むぜ、ファルコムさん。

俺は自分から進んで貰ったのに人のせいにしようとしていた。

「ふぁぁ。。。あ、マスター、おはようございます。どうされたんですか？」

「アーンヴァルが目を覚まさねぇんだよ。どうすればいいと思う？アーンヴァル…って、あれ？」

「え？私がどうかしました？」

「目を覚まさねぇから、どうしようかと思ったじゃねぇか」

「心配…してくれたんです？」

「…まぁな。俺の唯一のパートナーだからな」

アーンヴァルは「えへへっ」と笑いながら、俺のほうに飛びついてきた。

さて、ラステイションの協会についたんだが…。

「やっぱり、入らないとダメかな？」

「ここまで来たら、覚悟を決めましょうよ、マスター」

アーンヴァルの言葉に背中を押され、おれは教会のドアを開けた。

「おや。誰かと思えば、空から落ちてきた少女を助けたり、人形を目の前にあたふたしていたケイス君ではないかな？」

もうやだ、コイツ。

やっぱり間者を潜ませてやがったか。

だったら、こっちも。

「おや。誰かと思えば、女だとバレないようにサラシを巻いている神宮寺ケイさんではないですか」

「なっ、何で初対面の貴方がそれを知っているんだっ！」

俺は涼しい顔をしつつ、

「おや、やっぱりそうだったか。見事にブラフに引っかかってくれちゃって」

と言っておいた。

『世の中、情報がすべてを制す』でしたよね、ケイさん。

こっちには、原作の知識があるんですよ。

ケイさんは「くっ！」と言いながら、こちらを睨んできていた。

あ、やりすぎちゃった？

「ケイ、貴女そんな顔もできるのね♪」

そう言いながら現れた人影。
黒髪に赤い瞳のあの人だった。
「はじめまして。私はノワールよ」
「私は…」
俺が自己紹介を始めようとすると、ノワちゃんがそれを止めた。
「ケイから聞いて知ってるわ。ケイス、よね？」
正直、うれしいけどさぁ。
自己紹介くらいさせてよ。
まぁ、気を取り直して、と。
「えぇ。名前を覚えていただいているとは。恐悦至ご…」
と言おうとしていたのだが、また途中で止められた。
くきぃ～っ。
「ねぇ、ケイス。そういう物言い、どうにかならない？正直、ケイだけでおなかいっぱいなのよ」
「ノワール！？」
「…こんな感じでいいですか？ノワールさん」
「ん～、さんも要らないわね。ノワールって呼び捨てでいいわ」
「わかったよ、ノワール。これで？」

「ＯＫ！ｂ（≧≡▽≦≡）」

…この人、こんなにはっちゃけてたっけ？

「それでさ、ケイス」

「なんでしょ」

「１回だけでいいから、戦って！」

Ｗｈｙ！？

「何で！？」

「ケイから聞いてね、強そうだな～って思ったのよ。でも、実際に貴方を見たらそんなに強くなさそうに見えるじゃない？」

悪かったっすね。

「だから、１回戦ってみたいのよ」

「ケイス、…さっきの暴言は水に流そう。だから、ノワールと１回でいいから戦ってくれないか？」

ケイはそう言った後、小さな声で「本当に頼む。じゃないと、暴れて手が付けられなくなるんだ」と言った。

お前も苦労してるのな。

「わかった。ただし、条件がある」

「条件？」

「あぁ、女神化は絶対しないこと」

「貴方、私が女神だって知ってたの？」

「まぁな。ネプテューヌやブランから聞いてたからな」

「そう、…でも嫌」

何ですと！？

「ちょ。それ、勝負にならないじゃん」

「いいじゃない。ねぇ、やーろーおーよー」

良くねぇよ。ま、しかし何だ。女神と戦ってみるのも面白いかもしれないな。

「分かった。じゃぁ、条件変更だ。俺が勝ったら、ノワちゃんって呼んでいいか？」

「いいわよ、どうせ私が勝つんだし」

うしっ。だったら、気合入れるか。

そう思っていると、アーンヴァルが話しかけてきた。

「マスター、新しい武装があるんですけど、今回試していいですか？」

おぉ、いいねぃ。

「よろしく頼んだ」

「はい！」」

「それじゃ、人気がない廃工場ででもやりましょうか」

ノワちゃんはそう言うと、俺達を案内すべく歩き出した。

さて、吉と出るか凶と出るか。

……ＳＡＶＥ

第１５話　黒の女神（後書き）

ケイス「せんせー。タイトル詐欺になってまーす。タイトルが『黒の女神』なのに、ノワールさんが最後くらいしか出てませーん」

大丈夫だ、問題ない。

ケイス「さて、と。何か、アーンヴァルがすごいことになっているんだが」

本当はそこだけで１本書くつもりだったんだけどね。
早くノワちゃんを出したいがゆえにこうなった。

ケイス「で、新しい武装ってのは何？」

秘密。
でも、大体予想通りじゃないのかな？
だってさ、アーンヴァルの中にラファールが入ったんだよ？

ケイス「判るか、そんなモン。ちょっとひねくれて考えると、アーンヴァル自身が武器になる？」

そうかもしれないねぇ。

ということで。
それでは次回、「ノワールとの一騎討ち」でまたお会いしましょう

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6621w/

超次元ゲイム ネプテューヌmk2 もう一人の協力者

2011年10月19日02時04分発行